流域の人々と歩む月刊誌

くまがわ春秋

2017 8 第17号

考古学はドラマである

青井阿蘇神社の蓮池と楔橋　©山口啓二

月刊くまがわ春秋 第17号　2017年8月15日発行
企画：人吉球磨総合研究会　発行：人吉中央出版社
〒868-0015　熊本県人吉市下城本町1436-4の3号　TEL 0966-23-3759／FAX 0966-23-3759
http://www.hitoyoshi.co.jp/　info@hitoyoshi.co.jp

定価 540円　本体500円

考古学はドラマだ。

明治から昭和初期、肥後と球磨で繰り広げられた考古学者たちの動静を追った白熱のドキュメント

■A5判／約600頁／上製本
■定価3,000円（+税）送料200円

※九州内の紀伊国屋書店を中心に熊本市内の主要書店人吉球磨の書店、Amazonで取扱い中。　肥後と球磨 検索

目次

プロローグ　球磨の考古学事始
1 球磨の考古学研究の始まり
2 熊本県教育会史跡調査部の活躍
3 『球磨郡郷土誌』「五、古墳」
肥後国と球磨
1 肥後国の成り立ちと球磨
2 球磨の原史世界への誘い
考古学黎明期の肥後
はじめに
1 石器時代遺跡への注目
2 肥後の古墳への注目
3 肥後考古学の息吹き
明治期、球磨の考古学
1 稲留三郎翁の類推
2 寺石正路、闡幽舎主人と稲留三郎
3 城ヶ峰。闡幽舎主人と坪井正五郎
4 土佐の寺石正路の球磨漫遊
5 八木・江藤・田代と湯山の石器
考古学揺籃期の肥後
はじめに
1 熊本県における史跡顕彰の原点
2 考古学者たちの肥後訪問と古墳調査
3 京都帝国大学と肥後の考古学
4 肥後訪問と石器時代遺跡調査
5 大正初期、地元研究者の成長
6 肥後考古学会の設立
7 肥後考古学会の設立前後の熱気
8 大正期・昭和初期、球磨の考古学
1 新発見・大発見　球磨の考古学
2 柴田常恵の球磨旅行談
3 京都帝国大学装飾古墳調査の球磨
4 ある考古学者の誕生
5 考古学者高田素次の活躍
6 考古学ボーイ・ガールの登場
7 夭折した、ある考古学ボーイへの憧憬

発行元　〒868-0015　熊本県人吉市下城本町1436-4の3号
TEL・FAX0966-23-3759　info@hitoyoshi.co.jp　人吉中央出版社

雑誌 81779−08-7
4910817790871
00500

―８月（第１７号）目次―

書評「木﨑考古学」／12
木﨑考古学と遺跡①／16
木﨑考古学を知るための手引き書／19
ツクシイバラ　誌上作品展／20
球磨川の駅ものがたり⑰　松本晋一／22
定吉が行く⑰　鳥飼　博／26
建築⑫「郡築新地樋門群」森山　学／30
くまがわの神さん仏さん⑫　宮原信晃／34
記憶の落ち穂⑰　坂本福治／37
エンブリー夫妻を読む②　／38
医食同源⑫「食から学んだこと」浦川春加／40
くまがわすじの考古地誌⑪　木﨑康弘／42
短編小説「二人の兄弟と金貨」／46
いもご短歌会／49

柳人があじわう漱石俳句⑯　いわさき楊子／51
今月の秀句⑤　永田満徳／50
少年が見た「西南の役」㊦　馬場光俊／52
鶺鴒短歌会　七月詠草／53
倉敷便り⑧「特攻隊員」原田正史／54
方言を味わう⑭　前田一洋／58
あがっ段⑮　上杉芳野／60
字図で見る球磨の地名⑯　上村重次／62
今月の詩　⑰／65
「忍びの国」久馬　俊／66
文庫本『遺跡発掘師は笑わない』白城松男／67
「老いの片づけ」武井京子／69
新市庁舎　俯瞰図を見て　松本晋一／70
八代市長選／75
アオコ発生／76
外来語から学ぶ英単語⑰　藤原　宏／77
ひろしの「げっかん・ぎひょう」／77
くまがわ学習塾⑧／79
前号【くまがわ学習塾⑦の答え】／85
おっとわっとあすび⑥　松舟博満／86
くまがわ狂句　村上鬼拳／87

カラー特集

人吉市の2施設　登録有形文化財に／3
源流キャンプ／4
食処さかもと「鮎やな」営業開始／6
丑の湯祭り／9
晶子の球磨川を画集に／10

本誌の取扱店舗
■清藤書店■ブックスミスミ■明屋書店（錦店・免田店・多良木駅店）
■道の駅さかもと■ TSUTAYA 八代松江店

巻頭言

自然環境と政治

局地的豪雨と猛暑。不規則ではなく、それは通例の自然状況である。人為的原因によって発生した変化なのか、そうではないのか。日本の生産・生活スタイルがその一因か、ちがうのか。自然環境の変化の要因を因果関係的に立証するのは難しいが、要因であると推定されているものについては、たとえば地球温暖化の要因であるとされる二酸化炭素の削減などについては、それに積極的に取り組むべきである。自然環境を外部的要因で政治とは無関係であるとか、自然環境は外部不経済で経済活動とは関係がないといっている時代ではない。

自然環境の変化を前提にした具体的行動は当然に必要である。東京オリンピックは差し迫った、わかりやすい例である。「夏のオリンピック」には懐疑的な人は以前から少なくなかった。ここにきて、そういう意見が急速に増えている。そういう声に押されて、オリンピックを中止するとか開催時期を変更する方向もないわけではないけれども、「時、すでに遅し」で、予定どおりに開催されるとみるしかないが、オリンピック開催中に局地的豪雨が発生し、特定の地域で甚大な被害が発生するかもしれず、開催地東京がそうなる可能性もあるのであって、それを見越した対策はどうしても必要である。「時間が足りないでは済まされない」課題である。豪雨に苦しんでいる地域があるとき、その地域を救済できない政治ではあってはならない。高齢化を考えると、熱中症で体調を崩す人が急増するかもしれない。日本国民だけでなくオリンピックの関係者や観客もそうなりうるが、それに対応する仕組みはつくられていない。

オリンピックは一例である。オリンピックが開催されなくても、自然環境の変化は政治に直結するが、そうした方向で政治が動いている気配はない。「自然環境」は副次的課題と意識されているようにみえる。「環境にやさしい政治」は、少し前まではスローガンであった。その段階はすぎ、いまや、具体的政策をすすめる局面にいたっている。豪雨と猛暑だけでなく、地震もわれわれは経験している。自然環境は政治の一丁目一番地である。

（春秋）

青井阿蘇神社の2施設　国の登録有形文化財に

人吉市の国宝・青井阿蘇神社の歴代神社の創建から明治時代まで、大宮司大宮司の住居「旧青井家住宅」と、神職を務めた青井家の屋敷で、主屋（しゅおく）・西社前の蓮池に架かる「禊橋（みそぎ）」の2施設蔵・東蔵・門の4棟で構成されている。が国の登録有形文化財に登録される。

禊橋は県内に現存するコンクリート同住宅は、大同元（806）年の同橋では最古という。

青井阿蘇神社の「文化苑」内にある旧青井家住宅

神社前の蓮池に架かる「禊橋」（8月1撮影）

青井阿蘇神社内に掲げられた「旧青井家住宅」の案内板

「好古蔵」内には貴重な神器なども保存されている（撮影／山口啓二）

第21回源流水リレー
源流キャンプ

球磨川をこれまで以上に楽しむために、今回はキャンプ中心に7月29日、30日の両日開催された。

キャンプ当日、突然の雨のため、室内でのバーベキュー実施になったが、花火などは予定どおり実施。子どもたちから歓声があがった。

30日は、「山羊のいる球磨川」（あさぎり町）に立ち寄ったあと、瀬戸石駅付近に直行し、同駅付近から荒瀬ダム左岸下流約４００メートルまでラフティングを楽しんだ。荒瀬ダム撤去にともない球磨川の水の流れが復活した流域で、難コースであるため、ガイドの溝口隼平さんの協力を受けておこなわれた。

【写真提供】球磨川源流水リレー実行委員会（松田浩典さん、松永一喜さん、緒方大輔さん）、つる詳子さん

ラフティング後、ゴール地の水嶋神社に目指し、源流の水を同地で海にかえし、リレーは無事終了した。

《溝口隼平（みぞくちじゅんぺい）さん》

鹿児島県出水市出身。愛知県内の大学を卒業したのち、ダムなどの研究をすすめる。２０１０年、八代市坂本町に移住。荒瀬ダム、瀬戸石ダムの研究に従事。ラフティング技術も取得。一般社団法人ラフティング協会のリバーガイド。36歳。ラフティンング会社「リボーン（reborn）」を設立、８月1日から営業を開始。「リボーン」は再生という意味。

荒瀬ダム撤去関連記事

「食処さかもと　鮎やな」営業開始

編集部

荒瀬ダム撤去工事の進捗にともない、球磨川を利用した地域創世の取り組みが旧坂本村（八代市坂本町）で強まっている。「鮎やな」食堂の運営もそのひとつ。

7月22日、秀岳館高校（八代市）の生徒による和太鼓演奏ののち、同11時に営業を開始した。「鮎やな」は8月後半から9月にかけて設置予定。今回は、鮎料理販売を先行実施した。鮎の塩焼き、田楽、甘露煮などの定番メニューのほか、鮎の唐揚げ、せごし、鮎の刺身を用意。ご飯なども坂本産にするなどこだわりの店づくりにしている。現在は仮店舗で営業中。来年度は「道の駅さかもと」の中庭に店舗を構える予定。

最近のおもな出来事

7月16日（日）
▽繊月杯ソフトボール大会（人吉市第市民運動広場）
▽熊本震災チャリティコンサート「クラッシック・ナイト」（人吉市上薩摩瀬町イベントホールPRIMAVERA）

7月17日（月）　海の日
▽勝地温泉「かわせみ」感謝祭（球磨村同施設）

7月22日（土）
▽人吉市城本町「大村古墳まつり」（城本公園）

7月23日（日）
▽人吉球磨児童による「童話発表会」（人吉市カルチャーパレス）

7月28日（金）
▽にしきほるもん街道ビアガーデン（錦町役場前広場）

7月29日（土）
▽きじ馬カップU-13サッカー大会（～30日、人吉市梢山グラウンド）
▽第28回リバーフェスティバル「サガラッパ祭」（相良村柳瀬の河川敷）

8月5日（土）
▽第50回八代くま川祭り（八代市中心商店街、袋町～旭中央通）

8月6日（日）
▽映文協40周年記念上映会「この世界の片隅に」（あさぎり町須恵文化ホール）

8月11日（金）　山の日
▽「おどん達も応援団」立ち上がれ熊本！　東日本！　復興支援チャリティーショー（あさぎり町須恵文化ホール）

今月の二言

『文読む月日』（レフ・トルストイ編著　北御門二郎訳）より

水が高きにとどまらずして常に低きにつくように、善徳もまた、自らを高うする者のところにとどまらず、謙虚な人々のところにのみとどまる。

（『タルムード』による）

表紙写真　「青井阿蘇神社の蓮池と楔橋」

（8月5日撮影）

旧青井家住宅と共に、国の有形文化財に登録されることになった「楔橋」を数日かけて撮影。海外からのツアー客も、緑と赤のコントラストの美しい光景をカメラに収めていた。

撮影：山口啓二（人吉市）

丑の湯祭り

土用丑の日に（今年は7月25日であった）、日奈久温泉では「丑の湯祭り」を開催し、同温泉の繁栄を地域住民で祈願する祭りを実施している。同地の温泉神社で神事をとりおこなったのち、神幸行列が温泉街を廻り同温泉中心部（日奈久温泉センター ばんぺい湯前）で再度神事を実施するという段取りであった。

神事終了後は、関係者が夏の踊りを披露し、祭りは終了した。その日に同温泉を利用すると「1000日分の温泉の効能がある」と伝えられている。

同祭りの草創は不明である。神職によると、記録はなく、進物などからみて約100年前に始まったのではないか、以前9月20日から3日間とりおこなわれていた秋祭りを夏に移したようである、とのことであった。

前日に前夜祭があり、当日は、同温泉を15時まで無料で開放した。

日奈久温泉神社

市杵島姫命を祭神とし、応永26年（1419年）に弁天社として創建される。当初は、現在のばんぺい湯温泉（八代市営の温泉センター）にあったが、天明・文化の大火を受けて、文政5年（1822年）に現在地に移された。ばんぺい湯温泉前で神事をとりおこなうのはそのためである。

晶子の球磨川を画集に

人吉市の画家、坂本福治さん（80歳）が、歌人与謝野晶子が球磨川を詠った短歌17首を紹介する画集をつくった。7月15日から21日には、同市五日町「お菓子の紅梅人吉店」で個展も開催。女性用襟心の生地に歌と絵を描く斬新な手法の作品も展示され、試行錯誤を重ねたうえで採用したとのことであった。

坂本さんが晶子の画集を作るのは2作目。前作は2005年に作成。今回の画集はその増補版。前作発表後、晶子の歌碑があいついで建立され、現在、人吉市に11基、球磨村に1基ある。

坂本さんによれば、晶子にさほど関心があったわけはないが、彼女が球磨川の歌を詠んでいることを知り、たちまち、晶子のファンになったとのこと。晶子は昭和7年（1932年）8月、夫の鉄幹らと人吉市を訪問、鉄幹も球磨川の歌を詠んでおり、二人の歌を並べてみると面白いと坂本さんははにかんだ。

画集には坂本さんの解説がついているほか、松本彰二さんの英訳があって外国人にも楽しめる内容になっている。

個展会場での坂本福治さん

晶子が球磨川を詠った短歌 17 首とカルタ群

晶子・鉄幹・英訳

晶子「船の舳を波立ちかこみ球磨川の修理の背にわれ灌頂を受く」
鉄幹「舟こぞり笑ひ起りぬ球磨の瀬に水しぶきして眉の濡れるば」

英訳
Our pleasure boat runs down the Kuma River splashing bow waves
Holy Water blessed me on the head at the Shurinose Rapido

三者を並べてみた。それぞれに趣がある。鉄幹は「水しぶきして」とし、晶子は「灌頂を受く」とする。鉄幹は素朴である、晶子は主知主義にみえる。

「灌頂」は難しい言葉で「くわんぢょう」とよみ、インドで王が即位するときに頭にたらす水などを意味する。英訳はそれを「Holy Water」としている。

これは一例で、また鉄幹と晶子のすべての歌の特徴を示しているわけでもない。晶子には「君死にたまふことなかれ」とストレートに心情を示す歌もある。

晶子が球磨川をどうみたか。坂本さんの新著を通じて味わいたい。

書評

木﨑康弘著

『肥後と球磨 その原史世界に魅せられし人々 ―肥後と球磨の考古学史―』

考古学はドラマである。

上村雄一

嘘のような本当の話

本書は、熊本・球磨の考古学がどのようにして形成されてきたのかを主題にする専門書である。しかし、普通の専門書ではない。小説のようなドラマ性があって実におもしろい。無機質な学説史でなく、学説を担う人々に注目しているからだが、人間こそが歴史をつくるという筆者のスタンスをそこに感じる。たとえば、土佐の考古学者・寺石正路がなぜ球磨地方に関心を寄せるようになったか、どのルートを利用して球磨に入ったか、球磨でどのような作業をしたか、球磨川をどのようにみたかなどのエピソードを紹介しているのは一例である。角田政治の話もおもしろい。彼は、球磨地方の考古学成立の立役者で、そのために人吉を訪問したのだが、その直前に、人吉駅裏の大村古墳群を別の人物（下林繁夫）に発見されるという信じられない事件が起きている。あるいは、日本考古学の確立者である濱田耕作（京都帝大教授で、「日本近代考古学の父」とされる）が人吉訪問中に土器を割ってしまい、土器の所有者（犬童時）から叱られたうえに、「申し訳ないことをしました。京都に帰りましたら、同じものをお送りいたしますので、お許しください」という、嘘のような発言をした話も登場する。「同じもの」などありえないにも決まっているのに、近代考古学の父がそう弁明したというのだ。当然ながら犬童はさらに激怒する。

あるいは隠れ念仏で有名な高沢集落の話も印象的である。縄文式土器、磨製石器などとともに、アワビ・ハマグリなどの貝類が発見されたというのだが、それ自体、ドキリとする。同集落は山中のなかの山中というべきところで、アワビ・ハマグリとはすぐには結びつかない。しかし、そこに調査に向かった坂本經堯の話はいっそう面白い。「あへぎながら」段の峠を越え、白石駅についたというのだ。考古学者の真骨頂を示すとともに可笑しくもある。維新政府の命令にしたがって、遺跡がどのようにして地方政府、中央政府に集約されていったかの話も物語的である。有名な江田船山古墳の出土品の発見者「平民池田佐十」が「代価総計金八十円」を受け取るまでの経緯は、『宝物が出てきた夢』が発見のきっかけであったという嘘のような内容である。美術教師の福原岱郎が副葬品の太刀を雄略天皇の頃と比定していたことには、本当に、驚いた。

2017年6月31日　人吉中央出版社
A5判／約600頁／上製本／定価3,000円（+税）

肥後・球磨の人間はアイヌ人、それとも熊襲？

考古学の成立史は、「日本人は人種的には何人なのか」の論争史でもあって、幾重にも興味深い。単一民族論を考古学は最初からとっていないのである。現代の目からみるとき論拠の濃淡はあるが、偏見にとらわれない研究精神（科学的精神）が初めから考古学者にはそなわっていた。日本の考古学の出発点をどこにおくかについてさまざま意見がある。本書は通説にしたがいエドモンド・S・モースの大森貝塚の発見を出発点とするが、そのときから、人種問題は争点であった。アイヌ人でもなく、日本人でもない、先住民が日本にいたというがモースの結論で、その後、アイヌ人説、コロポックル説が繰り返し論点になっていく。

こういう議論に接すると、『魏志倭人伝』の日本人像がコロポックルに似ていることに思考回路がつながっていく。著者は、アイヌ人論を「縄文人」と読み替えていくことを通じて、人種論争を集約させているが、それもまた刺激的である。縄文人から弥生人への「進化」という図式に対して、東日本の文化＝縄文文化、西日本の文化＝弥生文化という区分論が有力にあるからである。それはまた、大和民族による多民族の征服という皇国史観とも重なっていた点にも注意を要する。考古学者は自由な発想の人々であったが、それでも、皇国史観の影響から完全には自由でなかった。

肥後とはなにか、球磨とはなにか

熊襲論を本書は別の形で検討している。それは、「熊本」と「肥後」はほとんど同一で、「球磨」は肥後の一部であるにもかかわらず、「肥後と球磨」という地域区分を採用している点にもかかわり、肥の国が肥前と肥後に分かれた理由にもかかわる。本書は、遺跡の分布状況から、古墳時代以前には、北部九州と南九州は菊池川流域を境にして文化的に分離し、それが肥後発生の遠因になっているとする、菊池川流域が両者を分ける場所で、一体は両者の緩衝地帯（国境の地域）として機能し、その流域の中心地（山鹿市）には威信財の遺跡が集中しているという。吉野ヶ里遺跡、さらには邪馬台国論、熊襲論などと関係づけたくなる指摘である。

他方、菊池川流域以南の文化の中心地は緑川、白川、球磨川流域であったという。薩摩は説明していない。薩摩は隼人と熊襲の一部の地域であったというのが、筆者の理解である。球磨地方についていえば、肥後と共通する文化を有しながらも、南九州（薩摩）の文化も存在する相対的独自の文化地域だとしている。これにかかわって、万葉集のいう「肥人、額髪結、染木綿、染心、我忘哉」についての筆者の説明は万葉集の解釈として適切で、「偏見」の有害性を示していて気持ちがいい。ちなみ万葉集のこの一節に、球磨川の別名「木綿葉川（ゆうばがわ）」の由来が含まれているのは当然であろう。

球磨の考古学成立史

モース、ゴーランド、坪井正五郎、濱田耕作、鳥居龍蔵を始めとするアカデミックな世界での動きとは別に、維新政府の文化財保護行政の動きも重要で、本書は考古学の成立史における行政の役割を正確に把握している。熊本県の場合、角田政治をはじめとする史跡調査部の活動は重要である。両者の相互作用のなかで考古学への関心が強まり、民間レベルでの考古学の世界が広がっていった。球磨の考古学について言えば、角田の影響が決定的で、それは球磨考古学の知的伝統を生み出す土台になった。著者は、高田素次の業績に多くの頁を当てる一方、球磨の考古学・学問的伝統の第一走者の名誉を土肥實雄に与えている。土肥にはじまる知的伝統は、上村素次、渋谷敦、乙益重隆、前田一洋などにつながっていくと著者はみている。著者本人は遠慮して触れていないが、その伝統は本書の著者・木﨑康弘に確実につながっている。これは球磨地方で共有できる認識であろう。

土肥の作業は確かに出発点にふさわしい。本書は、『球磨郡郷土誌』と『球磨郡史』の記載を比較し、土肥を両者の執筆者であると読み解いたばかりでなく、熊本県教育会史跡調査部による考古資料の展示に貢献した人物を土肥であると推測している。その推測はおそらく的中している。上村素次は唐突に突然に出現したのではなく、その前に、土肥という巨人がいた。土肥の関心は考古学だけでなく、郷土史全体におよび、エンブリーの須恵村調査に協力しただけでなく発行直後のエンブリーの著作「スエムラ」の翻訳を戦時下で進めていた。土肥は「郷土雑誌球磨」などの地方誌を主催し、その後継誌「人吉文化」を高田が編集し、「人吉文化」の伝統を伊勢戸明編集の「週刊ひとよし」が引き継いだ。伊勢戸の死後、渋谷敦、前田一洋が同誌を支えたのであった。著者はそうした知的伝統を本書で意識的に要約している。

猪ちゃん

高田素次、乙益重隆、前田一洋の知的連環の中心部に井上猪一郎がいる。17歳で夭折した「猪ちゃん」である。彼は天才肌であった。考古学をこよなく愛した少年であった。本書は、猪ちゃんを本書のまとめに置いた。筆者の心情はこの部分に集約されている。涙が出そうになるまとめである。そこに、著者の決意を感じる。

【うえむら・ゆういち／編集主幹】

木﨑考古学と遺跡 ①

木﨑康弘著『肥後と球磨 その原史世界に魅せられし人々』（以下、「木﨑」と略記する。）を手に持ち、いくつかの遺跡をまわった。

1、大野貝塚（八代郡氷川町大野）

ベンジャミン・S・ライマンは、「薩摩街道（現在の国道3号線）沿いの斜面に露呈した、貝殻の層」を見つけた。それは「大野貝塚の発見」だった（木﨑39頁）。同地区を散策したが、該当場所をみつけだせなかった。E・S・モース『大森貝塚』（近藤義朗・佐原真編訳　岩波文庫）の「解説」は、大野貝塚を「当尾貝塚」（宇城市松橋）であると理解しているので、念のため同地区に行ったが、同じく発見できなかった。

当尾小学校付近

2、大野窟（おおのいわや）古墳（八代郡氷川町大野）

前方後円墳。6世紀後半（古墳時代後期）の築造。熊本地震のため立ち入り禁止になっている。入口付近を写真に収めた。地元の女性（85歳前後）は、同古墳を「ほこら」と説明された。

大野窟

3、野津（のず）古墳群（八代市氷川町野津）

物見櫓古墳、姫ノ城古墳、中ノ城古墳、端の城古墳の4基の前方後円墳がある。大野窟古墳に近く、説明碑もあるので場所は分かるが、古墳の形状、構造は確認できなかった。いずれも、大野窟古墳と同時期に築造されたと推定される。

中ノ城古墳の説明碑。このように場所は特定できるが、古墳の全体は確認できない。全体を確認するためには上空または遠方からみるしかない。宅地化が進んでいることもあって後者の方法は難しい。

《遺跡の時期区分・当時の人々の生活》

木﨑は、肥後・球磨の考古学の成立史を描くことを目的にし、旧石器時代、新石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代などの遺跡の時期区分に触れていない。それについては同書末尾の索引を参照すればいい。それぞれの時代の人々の生活に触れるところも少ないが、それについては別の機会にまとめられるであろう。

木﨑は「考古学」でなく「原史学」の用語を採用し、「原史」を本のタイトルにしている。故・杉原荘介教授の用語にしたがったもので、厳密には「考古学」という用語とは一致しないが、ひとまず、同義と理解して読んでいいであろう。木﨑序文参照。

4、宮浦地下式板積石室古墳群（芦北町佐敷宮浦）

川内川流域や鹿児島県北部の海岸に集中し、宮崎県、熊本県等に分布する、弥生時代後期の隼人族独特の古墳。

昭和45年の調査で4基を発掘し、弥生期の土器、鉄鏃、鉄剣等が多数出土したとされる。宮浦阿蘇神社の敷地内にあるが、現在は埋め戻されている。同所は佐敷城跡の近くにある。この古墳群に木﨑はふれていないが、球磨独自性論を考えるさい参考になる遺跡である。

宮浦阿蘇神社

天文2年（1553年）に、当時葦北郡を支配していた相良義滋が創建。現在の社殿は泳法年間頃の建造と推定されている。

宮浦神社近くの広場

この下 40 センチから 45 センチの場所に古墳群は埋め戻されていて、外部からは、遺跡をみることはできない。

木﨑考古学を知るための手引き書

①《S・モース『大森貝塚』（近藤義朗・佐原真編訳　1983年　岩波文庫）》

本書は大森貝塚を理解するうえで必読書である。モース自身による大森貝塚の分析方法の紹介、結論、位置づけはもちろんのこと、モースの大森貝塚論に対する反論、モースの再反論の論文を関連資料として収録しているほか、1983年（昭和58年）当時の、編訳者によるモースに対する評価、同じく日本の考古学の状況に対する評価を収めている。

②《濱田耕作『通論考古学』（岩波文庫）》

濱田耕作の同名の単行本『（1922年＝大正11年）を現代表記に改めたうえで文庫化したもの。「日本近代考古学の父」と称される濱田の考古学を知るうえでの必読書である。木﨑康弘も濱田の論文を各所で引用しているほか（特に、242頁参照）、「大正11年版」もその引用文献に挙げている。岩波文庫版の春成秀爾の「解説」は、清野賢次の本書に対する評価を紹介するなど、木﨑考古学を理解するうえでも見過ごせない一冊である。

③《鳥居龍蔵『ある老学徒の手記』（岩波文庫）

鳥居龍蔵の来肥は肥後の考古学の成立史で重要な位置を占める。木﨑康弘は、389頁以下でそれを力説している。木﨑は、鳥居を「考古学の巨人」とすると同時に、「鳥居の人生は実に面白い」とする。確かに、そのとおりである。本書は、そうした鳥居が書いた自叙伝で、一気に読める。1953年（昭和28年）に朝日新聞が発行した同名の単行本を文庫本にしたもの。単行本は「考古学とともに六十年」のサブタイトルがついている。言語学者の田中克彦が本書の「解説」を書いているところに表れているように、考古学に収まらないところに鳥居の魅力がある。

誌上作品展　フォトコンテスト

主催：法人会人吉支部
後援：球磨川ツクシイバラの会

グランプリ
「朝陽に遊ぶ」前田雅子さん

「希望の夜明けⅡ」梅田 勇さん
（審査員特別賞）

「河畔に咲く」季平剛二さん
（人吉地区法人会会長賞）

【ツクシイバラとは】1917 年６月９日に前原勘次郎氏によって球磨川の支流、免田川で発見されたバラ科のバラ属に分類される植物。九州を意味するツクシ（筑紫）とイバラを合わせた名前で、5月下旬から約ひと月間、球磨川の畔で可憐な花を咲かせる。。

河川改修や盗掘で絶滅危俱種に指定されたが、現在は「球磨川ツクシイバラの会」（桑原史佳会長）が中心となり地元住民と一緒に保護活動を続けている。

「あさぎりの中から」段村善昭さん
（女性部会長賞）

球磨川のツクシイバラ　公式発見 100 周年記念

絵手紙コンテスト

主催：球磨川ツクシイバラの会
人吉地区法人会 錦支部

小学生の部グランプリ
末廣希望さん

中学生の部グランプリ
土肥和嘉奈さん

一般の部グランプリ
林田ゆきみさん

幼児の部グランプリ
田原和果さん

河口から上流まで、その駅を訪ねる

球磨川の駅・ものがたり

連載その⑰　くま川鉄道・川村駅

熊本産業遺産研究会　松本晉一

相良藩願成寺を出るとすぐに願成寺踏切、左に相良家墓地を見て、線路は次のカーブで石清水跨線橋（平成11年架替）をくぐる。途中、旧湯前線と肥薩線を境する高台には古刹の観音禅寺と観音寺観音（相良観音13番札所）が在り、そこから球磨川第三橋梁とその築堤が良く見える。

現在の起点 2.5km 付近

線路は起点・人吉温泉駅から2k500m付近で見通しの良い球磨川右岸へと出る。続いて九州自動車道下を抜け、チェリーゴルフ場横の直線へと続く。この直線路は平成7年7月の大雨で道床流失、列車転覆事故

開通当時の馬場第二踏切と十島村道、人吉町遠望

が起きている。昔はそこには馬場第二踏切があり、十島へ抜ける村道があったが、平成11年に踏切は封鎖され人通りもなくなった。

以前はとても良い散歩道で、途中には相良家五代頼広時代の戦の名残、薩摩五輪塔（首塚・柴立さん）があり、右手の地蔵鼻断崖下が球磨川の〝戦ノ瀬〟、その

同踏切の貨物列車（現SL人吉号機関車、福井弘氏）

川向い側は〝花立淵〟である。村道は旧御舟場の地蔵石塔脇を通り、その先の十島神社に通じていた。今後、この静かな雑木林の旧村道復活を期待したい。十島第一踏切を過ぎると、

←①肥薩線　↓②湯前線　↑③旧村道　↙④旧御舟場
⇒⑤戦ノ瀬　⑥↘花立淵

線路は大きく左にカーブしながら下降、川村の田園地帯へと向かう。

⇒直線路　↙十島神社　←戦ノ瀬　⇐流失地点　↖川村

十の島を持つ十島菅原神社

川村駅（かわむら）（副名称「ラフティングストーンズ川村駅」）

この駅の１００ｍ南側には球磨川、そして左手（北東）３００ｍは球磨川最大の支流・川辺川で、駅はその合流点直下に位置し、駅名も川に近い村、昭和31年の合併前旧村名「川村」を冠する昭和28年（１９５３）７月開業の請願駅。駅位置を十島地区か、川村地区かの論議があり、川村の中心地ということでこの地に決定、村民も勤労奉仕で貢献したとのこと。所在地は起点から4.4㎞、球磨郡相良村大字柳瀬１３１４の３番地。駅は無人の１面１線４輌用の短いホーム、昭和40年代に東側が20ｍほど延長された。昭和54年度の一日平均乗車人員は普通が17名、定期が57名の記録がある。周囲は田圃や煙草の栽培地の田園地帯で、近くに川村駅入口の産交バス停がある。駅の小さな待合所は国の登録有形文化財に指定されている。

丁度、取材時に人吉駅を11時01分発の観光列車田園シンフォニーが到着。地元の川村駅無人駅を守る会の皆様による〝おもてなし〟が始まった。待合所には相良村の新茶やお菓子の接待がなされ、遠くメキシコからの家族連れが川村名誉駅長の下田幸（みゆき）さん（95歳、九州名誉駅長最年長）らの出迎えで、和やかに写真を撮り

川村駅　十島方面

文化財認定証（平成 26 年）

歓迎の挨拶

地元駅を守る会の接待とメキシコ客

合っていた。またホーム東寄りに西方９００ｍに在る十島菅原大社のミニ神社が据えられ、学業祈願の御札も下げられている。列車を見送った後、筆者らまでお茶をご馳走になる。

乗降客は今はわずかに通学生と買物客が主体だがその昔、昭和40年代は車内は通学生で満員。隣の西村駅まで連れていかれ、やっと降りたら、川村までの戻りはハイヒールで第４橋梁を歩いて帰った時代もあったとのこと。

駅築堤の決壊（昭和 40 年水害）

夏の権現橋の飛び込み（右端は専徳寺）

またこの地は球磨川本流と川辺川の合流地点でもあり、昭和40年と46年の水害でホームは決壊、この駅周辺が水で浸かり、鉄橋下の川寄りにあった５軒は軒下まで浸水、住民は泳いでこの駅に辿りついたとのこと。この数回の大水で、駅のホームはいつも水浸しとなり、数回の補修工事がなされている。

駅の北方７００ｍには雛人形で有名な専徳寺や蓑毛観音（15番）が在る、現在人形展は休止中。その東側山上に井沢権現社と権現橋があり、夏には中高校生たちの格好の跳び込み場でもある。その橋から下流の球磨川第四橋梁が遠望出来、鮎釣りの太公望も多い。両川の合流点脇には以前、砂利採取場があり当時は川も濁っていたが、それが移転して綺麗な川に戻っている。今年も川辺川と球磨川は、国交省の〝清流日本一〟に選ばれた。

同橋の遠望（第四橋梁方面）

〈参考資料〉
・球磨の駅「川村」昭和56年6月16日　人吉新聞
・前掲「熊本の駅と港」熊本の風土と心③
・くま川鉄道転覆事故　人吉新聞　平成7年7月5日
・くま川鉄道開業20周年「盆地を走る」川村駅　平成21年5月8日　人吉新聞
・球磨人吉今昔写真帖　２０１１年6月　郷土出版社
・目で見る球磨・人吉の百年　２００１年2月　郷土出版社
・各種ネット資料とウィキペディア
○資料協力　高木正孝　福井弘

人吉観光案内人物語

住吉則昭

定吉が行く

— 17 —

© Keiichi Murakami

九州相良藩「吉組」大番頭　鳥飼 博

エピソード

9月になると月末に予定しているコンサートのチケット販売に追われた。定吉が7月初めに人吉市職時代の先輩からのお願いを受けて開催することとなったからだ。私たちが若い頃に流行ったフォークグループ「ふきのとう」のコンサートである。二人だけのグループだったがその後解散をし、それぞれソロで活動しているらしい。話を持ってきた定吉の先輩もグループや曲についてもご存知ではなく、早速インターネットの力を借りて、その後の「ふきのとう」について把握した次第である。

そこで判ったのは、今回のコンサートの歌手は高音の美しい声で歌う方ではなかった。吉組の40歳前後のメンバーに尋ねても「ふきのとう」については知らない世代であり、売れた曲名を言っても知らなかった。その曲を聴かせると、聞いたことはありますという程度で、前途多難であることだけは皆が理解できた。

「吉組さんにお願いがあって今日は来ました」と言われる先輩に、「わざわざお出で戴いたとですけん、話ばお聞かせ下さい」と言っていたが、詳細が判り、無言になってしまった定吉を見た市職の先輩は、「とにかく宜しく!!」と言って帰っていかれた。

コンサート開演時の「人吉よさこい銀翔会」の演舞

吉組という団体は、どうして断ることをしないのか。全てが初めて経験することばかりなのに。「お断りしましょう」という声は無いままに「どういう風にやろうか」となる。

早速、その場で企画会議が始まり、40歳以上をターゲットとし、他の団体の協力を得て実施することとなった。開演時には、「よさこい銀翔会」の演舞で盛り上げ、ザ・ビートルズの演奏では地域NO.1と評価の高い「ザ・ハーツクラブバンド」の皆さんに前座を飾って頂くこととなった。

吉組責任者は【中番頭ほうびゃ～の義吉】。コンサート会場の予約、控え室、音響、照明、食事、飲み物、チケットの割り当て、ポスターとチラシの配布、当日の準備や人員確保など、映画やよさこい祭りの準備と並行して頑張ってくれていた。

そんな中にも人吉駅前広場には、カラクリ時計の案内をする定吉の姿があった。余りの暑さに駅舎に留まり、カラクリ時計の周辺までは出て来ない観光客が多かった。

カラクリ時計を案内する時の定吉の口上を紹介しよう。

「八幡、瓦屋、中青井、チョロチョロ流れる御溝川。着いた所が蓮の池。桜馬場から見上ぐれば、漆の柱に茅の屋根。立派な門だよ青井さん。四方八面、鬼の面。飾り金具に透かし彫り。獅子神様もお出迎え。くんちビンタ（頭）

【吉組】が撮影に協力した映画「おじいちゃん、死んじゃったって。」のポスター。今年11月、テアトル新宿ほかで全国公開決定。10月には人吉市で先行上映会が開催され、森ガキ監督と主演の岸井ゆきのさんが舞台挨拶される予定

に、くんち風。くんちギモン（着物）に、くんち下駄。今年もくんちがやって来る。一番獅子が飛び出した。二番獅子がつっこけた。三番獅子はえちくらい（酔っ払い）。四番獅子はオナゴ好き。おくんち祭りは青井さん」

この口上の前後に、「何処から来なったですか?」と尋ねるのが常である。

「私の口上が一番受け、面白いのが大阪のおばちゃんです」とも付け加える。

どうして大阪のおばちゃんなのか?

ある時のエピソードを語ってくれた。

大阪のおばちゃんグループがカラクリ時計を見に来た。いつもの様に定吉が、「大阪のおばちゃん、もとい、大阪のお姉さんはヒョウ柄のお召し物が多いですけど、今日はいらっしゃらないみたいですね」と言うと、すかさず後方からしゃしゃり出て来て「着てますねん。ほら～」と上着をはだいた瞬間に連れのおばちゃん達から笑い声が起きた。連れまで入れると10余名のおばちゃんに怯みそうな動揺を抑え、「ホントに大阪の方ですか? 大阪のお姉さんは、飴ちゃんを持っていますよね?」気の弱い定吉が裏返った声で尋ねるとそのおばちゃん、バッグから飴袋を取り出して飴玉2個を「あげる」と言って定吉に渡した。「なんか、要求したみたいですね～」と言いながら飴玉を前掛けのポケットに入れた。定吉曰く、大阪のおばちゃんは、だいたい飴玉2個のパターンだそうである。

駅前広場の定吉

定吉はダイヤ改正があるまで、くま川鉄道のお見送りもしていた。ある日、大阪のおばちゃんの団体を見送る時に定吉の悪い癖が出てしまい、列車に乗り込みおばちゃん達と喋りまくっていた。発車のベルが鳴り定吉が列車を降りようとすると、おばちゃん達に捕らえられ、隣駅の相良藩願成寺駅まで同乗させられたことがあったそうだ。駅に降りた定吉は、人吉駅まで歩いて帰ったそうである。このエピソードを聞き、

「何んもされんだったですか?」と私が尋ねると、「前掛けばしとったけん、大丈夫じゃったばい。大阪のおばちゃんな一人でもやおいかんとに、団体はおとろしかばい」と言った。

定吉はアルコールが苦手である。気持ちの良い集まりの時には球磨焼酎をコップに少し注ぎ、生を舐めるようにしてコップ半分の水を飲む。座が終わる頃になっても最初の焼酎は、半分も減ってはいない。しかし、飲み座が嫌いなわけではない。一番酔っ払っているのではないかと思われる程に喋るし、ウロチョロしている。こんな定吉が「ひっくり返り事件」を3度起こしたことがある。

騒ぐ定吉

映画撮影とよさこい祭りも無事に終了し、コンサートのチケット販売を始めた頃に2回目の事件が起きた。1回目は「ひっくり返り事件」というよりも「飛び込み事件」である。次号で紹介しようと思う。

定吉を筆頭にメンバーの大半が7月～8月までの2ヶ月間を、休むことなく活動していた。そこで、区切りの良い所で打上げをしようということになり、9月初めに【銃吉】のマスカットで祝杯を挙げた。定吉は挨拶の中で、皆に慰労と感謝の意を伝え、この宴を一番喜んでいた。楽しくて仕方がない様子の定吉は異様なほどに騒ぎまくった。中座をしてトイレに行く定吉を横に見ながら視界から消えた直後に「ガタ、ガタン」と大きな音が店内に響いた。トイレの手洗い前に座り込んだ定吉の体は、10分程震えが止まらなかった。

その後、定吉の手をとり店外で看護していたのがオカモトに勤める【目立ちたがり屋の平吉】だった。トイレに立ち用を足す時間もなくひっくり返った定吉を、老人介護人の様な思いで心配していると、「主宰は、疲れが溜まっとらすごたっです」という【平吉】の報告を受け、打上げはお開きとなった。

【とりかい・ひろし／人吉市】

建築みてある記⑫

郡築新地樋門群をあるく

森山　学

球磨川から取水された用水は八代平野の隅々へ行きわたる。杭瀬（今の遥拝堰）では南北朝時代、遥拝一番井樋から奈良木井手へ、湾洞（わんど）から太田井手へと取水され、左岸の高田郷や右岸の太田郷の水田を潤した。

七百町新地（文政四年＝一八二一）造成時の新川（麓川用水路）のように、干拓が盛んになってからは干拓地へ水を引くため用水路がつくられた。

郡築新地干拓（明治三七年＝一九〇四）では萩原の稲荷堰から郡築用水が引かれ、楠堰（明治四十年＝一九〇七）からはぜ塘の堤内地へ引き入れられた。この楠堰は現在も残る。

県営南新地干拓（大正十一年＝一九二二）では、稲荷堰の近くに取水口が設けられ、昭和用水が引かれた。この萩原樋（大正十一年＝一九二二）の面壁も現存する。

郡築用水も昭和用水も、遥拝堰が現在の姿に改築されてからは、遥拝堰から引かれるように変更された。それでもこうした遺構や空堀化した水路跡などが残っていると、かつての水のくらしを思い描くことができる。あらためて言うまでもなく、八代平野の広大な干拓地は、球磨川とその用水に多くの恩恵を受けているわけである。

ところで干拓地を潤した水は潮だまりに貯まり、これを樋門から海へ排出する。球磨川の水は、海へ流れ出る最後に樋門を通るわけである。ただし満潮時には、海水が逆流するのを防ぐため、樋門を閉じる必要がある。

今回は八代平野の排水樋門群のうち、八代平野最大の干拓地、郡築新地の樋門を訪ねる。郡築三番町樋門（旧郡築新地甲号樋門、明治三五年＝一九〇二頃）と郡築二番町樋門（昭和十三年＝一九三八）である。どちらもバス停「郡築二番町」で下車し、徒歩十五分ほど。

まずは三番町樋門（写真①）へ。これは当初に建設された三基のうち現存する唯一のものにして、現役の樋門である。長さ三三メートル、現存する明治期のものとしては最大級である。その全長にわたる通水部には十連のアーチが開き、両サイドに堅牢な袖石垣が控える。

写真① 郡築三番町樋門の東側。袖石垣の間に十連アーチ

アーチ内部はレンガ積みで、東の内陸側の迫石（せりいし）（アーチの輪の部分）も三重のレンガである（写真②）。三重のレンガの迫石の上に、さらに切石を扇状に積んでいる。

写真② レンガの迫石、段状の脚壁、ホームベース型の切石の層

その上の面壁は、ほぼ正方形の切石を六段に積み上げている。そこで目につくのが下から二、三段目である。この二段はホームベース型の切石を上下に噛み合わせるように積んでいる。構造的な強化を目的としつつ、ちょうど脚壁の上端のラインにあい、見た目にも美しいアクセントとなっている。アーチとアーチの間にある脚壁は段状である。堰板を落とし込むための溝も切られている。全体に品のある表情と言えようか。

写真③ 郡築三番町樋門の西側。スチール製ゲート

西の海側（写真③）は、現在はスチール製ゲートで覆われているが、記録写真からアーチの迫石

は切石であったことがわかる。面壁から切石が突出するリズムや階段状の天端など、かつては東側と異なる饒舌な表情を見ることができたようだ。

袖石垣（写真④）のうち、樋門へむかって斜めに配された、いわゆる翼とよばれる部分は布積みである。水平に層をなすように積む積み方で面壁と同じ積み方であるが、面壁ほどの精緻さはない。さらに外側の袖壁は乱れ谷積みとなり、石のサイズはバラバラで切石でないものもある。このように中央の品のある佇まいから、外へむかって力強い荒々しさへと移り変わっていくのも、三番町樋門のデザインの特徴である。

写真④ 積み方が変わる袖石垣

次は二番町樋門（写真⑤）へ。昭和十一年（一九三六）、高潮により郡築新地堤防が決壊し、堤防の補強工事が行われた。その際に新設されたものである。すでに鉄筋コンクリート造の樋門がつくられていた時代に、石造でつくったこだわりがいい。三番町樋門の壮大さはなくこぢんまりとしているが、こだわりが生み出すデザイン志向の強さが魅力である。

全体は通水部がある層と面壁の層の二層で構成され、通水部はまるで面壁の基壇のようである。通水部は三連アーチで迫石は石材である。アーチとアーチの間には、脚壁が舳先のような剣先水切のかたちをして、よく水の流れをつくる。この上に繰形（断面がカーブを描く装飾）のある縁石が乗って、基壇の葛石となる（写真⑥）。

写真⑤ 郡築二番町樋門の東側。三連アーチ、剣先水切の脚壁

この上に面壁が立ち上がる。こぶ出し加工された切石の布積みで、長い石と短い石を交互に置く。この方法はレンガ積みのフランス積みのようである。また上三段にくらべ下三段の石の方が高く、下段ほど重さを支えている様子を表現する。まるでルネサンス期の貴族住宅のようである。さらに面壁に二本の円柱の柱型が突出する。基壇の上に立つ柱というイメージは、木造のお寺に通じる。最上段の石は貴族住宅の軒蛇腹のように、もう一度繰形がほどこされる（写真⑦）。

写真⑥ 縁石の繰形。奥に優雅な階段

写真⑦ 面壁の柱型と軒蛇腹

面壁の上にはコンクリートの小堤がのる（写真⑧）。これは橋の高欄（手すり）をイメージしているのだろう。柱型は親柱、親柱の上の半球体の装飾は擬宝珠、柱間の四方入隅の装飾は手すりと解釈できる。

写真⑧ 小堤。親柱、半球の擬宝珠、四方入隅の手すり

両側の袖石垣上の階段は、カーブを描きつつ優雅に下りてくる。貴族住宅のホールのように。

二番町樋門はクラシックとモダン、そして豊かな隠喩に満ちた建造物である。

【もりやま・まなぶ／高専教員、一級建築士、八代市】

くまがわの神さん仏さん⑫
球磨村お堂巡りその①

宮原信晃

机に1冊の小冊子が座っている。

それは『仏がみちびくふる里めぐり』という球磨村公民館主事の柳詰恒雄さん（元村長）が発行したもの。

その本が前田一洋さんに渡り、そして私のもとに来た。

「小生、二冊所持しているため、本書がより活用されんことを念じ、一冊ご贈呈致します。平成二十二年ひな祭りの日」と前田さんから。

この本には第八十八番までの球磨村の仏様のおられる札所が列記され、資料を含めて150ページと読み応えがあるのだ。しかも、その札所の集落に行ったこともないのに、つい行った気持ちになり、いつか集落名が耳に入れば、「あそこは薬師堂？　観音堂？　うんにゃ、地蔵堂ばい！」といつの間にかその集落に住んでいる、そんな気持ちにもなる不思議な本なのだ。

第一番の札所は一勝寺、二番は意足院、三番柳詰阿弥陀堂から松舟・田代・岳本・日隠へと上り、下って次の沢を上り球磨川へ下って次の沢を上るといった球磨川の仏様のガイドブックなのだ。

集落名とお堂の名称が合わさったものであり、どこにどんな仏様が座ったり、立ったままお堂に江戸期からおられるとか、身長がどれほどのものとか、それはくわしく仏様の身体検査を紹介している小冊子なのだ。

今回、やっとお会い出来た仏様の御報告を致しましょう。

球磨村役場の下の道を高澤へ登る道へ進み、すぐ、右へ。

「岡集落」へ登ってみましょう。

岡薬師堂（球磨村）

これまで3回程、岡集落の藪椿の下をうろうろしたり、その周囲を探索したがお堂が見つからなかった。誰かに尋ねればよいのだろうが、昼間はお仕事で家におられないようだった。今回は藪椿の下の家へ尋ねて行った。ご夫婦がおられて、岡集落は久保と椎葉という集落が合わさって岡になったことと、下の椎葉に公民館とお堂があることを教えて頂いた。なるほど！

下の椎葉集落に車を駐めて徒歩で下へ歩いて行く。ある家にお話を聞こうと、開けっ放し、鍵なしの家には誰もおられずに、しかたなく、もっと下へ向かった。水源地の水を見ながら、たまに飛んでくる蜂を除けながらテクテク歩く。

公民館があった。お堂はその真後ろに、ちょうど神社の拝殿と本殿のように連なっていた。

お堂に入ってみると、それはそれは優しいお顔の薬師如来様がすっく

岡薬師堂の薬師如来像

と立っておられた。左手に薬壺を持ち親指と人差し指で印を結び、右手は親指と中指で印を結んでおられる。いつもながら「印相（指のサイン）」は何を今の世の私たちに伝えておられるのか、岡薬師堂の仏様の印相は私に何をせよと仰せなのか。私には想像もつかないことであり、無学を痛感する仏様との対面であるのだ。

「ごめんなさい、わかりません、なんまんだぶつ」。

お堂の中の木札に書かれた、集落の人達の何代か前の方々のお名前を読みつつ、賑やかだったお堂の中の姿を想像してみる。

「孫」が出来た喜び、山の幸が豊富だったことへの感謝、嫁が来た報告、じいさんが亡くなった話、娘がどこそこの人に嫁いだこと、イノシシが昨日ワナに掛かっていたこと…などなど。

四季折々のお堂の中で、手を合わせ、老いも若きも集っての焼酎のみの何と賑やかなことか。

そのお堂の行事の始まりは、みんな揃って「なんまんだぶつ」なのだ。

お堂の仏様が、薬師如来であろうが、お地蔵さん、観音様であっても、球磨村のお堂の中では、「なんまんだぶつ」と手を合わせて祈る。

悲しさ、嬉しさ、希望や感謝にも、口からでる念仏は、「なんまんだぶつ」。

「日本一豊かな隠れ里」と唱われた人吉球磨の日本遺産認定も実は、球磨村のような、隠れ念仏のお堂の姿こそ、本当の「心豊かな隠れ里」の姿なのだ。

岡薬師堂から帰るときに、鬼百合がありがとうと風になびいた。

【みやはら・のぶあき／FBお地蔵さん調査隊代表・人吉おおくま座の会事務局】

記憶の落ち穂

その ⑰

絵と文／坂本福治

金子兜太と同席

平戸市で山頭火大会が開かれた時のこと。一人、自分の車で出かけた。俳句の世界でよく知られた金子兜太氏が講演されることになっていたからだ。その前に、私はある資料を送っておいた。多くの山頭火愛好家たちは、山頭火が酔って市電を止めたとき、彼を寺に連行した人物は、新聞記者だったと信じている。ベストセラーになった山頭火の本にそう書かれていたからである。私が金子氏に送ったのは、これを否定する内容だった。

会場は満席状態で、最前列しか空席がなく、勇気を出してそこに座った。ところが、となりに金子氏が座られた。そこでまたも勇気を重ねて、資料を送った者だと名乗った。

すると、「あ、あれは面白かったです。読ましてもらいました」と言われた。そして、講演のはじめに、私の主張を話され、「地方に来るとこんなニュースがあるから楽しい」と言われてから本題に入られた。

【さかもと・ふくじ／画家、人吉市】

※訂正　前回の今村氏の名は英輔でした。

エンブリー夫妻を読む②

（編集部）

スエムラ（須恵村）の5地域

エンブリーは、須恵村の部落を5地域に分類している（「部落」はエンブリーの表現である）。

『須恵村の女たち』25頁より抜粋

中島地区

1、水田型部落（中島、川瀬）

球磨川を横切って水田の平坦部に位置している。一戸当たりの人員が比較的多いこと、裕福なこと、社会的結合が親密なこと、共通の経済的利害関係のもとにあること、といった特徴がある。

2、丘陵部落（上手、今村）

稲作には適さない、農産物の産地ともいえない土地条件のところにある。部落内に水田はあまりなく、稲作をするには川を横切って行かなければならない。

3、商店部落（覚井、頓所）

覚井には、須恵村のほぼすべての商店、村役場、焼酎工場などが集積している。県道はここを通過している。商店部落は、他の部落と比べると、社会的に統一されていない。

覚井地区

4、山の部落（平山）

どの部落からも一番離れている。農業に従事する者は以前から定住している家族である。山の仕事に従事しているのは他の地方から移住してきた家族である。

平山地区

5、新部落（湯ノ原）

深田村と阿蘇地区の間にある。村外から人々が移住してきて、新部落になった。住民はすべて農民で、ひとつのグループに帰属していく意識が強い。

医食同源 ⑫

私が食から学んだこと

食育を始めて 10 年

浦川春加

私のコラム連載も今回で12回目となりました。

今まで頭の中で常に考え、調べていることを、千字程度にまとめる作業は、私にとってはとても有効で、益になることです。編集の方々に感謝申し上げます。

さて今回は、私が食の勉強をはじめて何がどう変わったかを書いてみようと思います。

「医食同源」という言葉の通り、食べた物がその人を創る、という身体の変化はもちろんですが、私にとって大きく変わったのは、物事の見方や捉え方が変わったことです。

私は食育インストラクターの免許取得から始まり、マクロビオティックや薬膳の勉強をしています。そのマクロビオティックや薬膳に欠かせない思考が「陰陽調和」です。

陰陽調和とは、万物は「陰」と「陽」、相反する性質の織り成すメカニズムが働いている。という東洋の伝統的な世界観です。簡単に言うと、「陰」は拡散していく遠心的なエネルギーで、「陽」は収縮する求心的なエネルギーだとされています。

ただ、それは絶対的なものではなく、ある性質を「陽」とすれば、相対する「陰」の性質が存在する。といった表裏一体なもので、互いにバランスを取り合いながら食の調和を計るものです。

私はこの「陰陽」を食に取り入れ始めてから、食以外でも相対するものや、相対する事案があることに気づきました。

例えば、人間には長所と短所があって1人の人格が成り立っていること。

辛いことがあっても、必ず嬉しいこともあるということ。

闇があるから、光は、輝く事ができるということ。

光の中で光を見つけることは、できませんからね。

どちらかだけに囚われてしまうと、相反するものの存在を見つけることができず、あたかも、自分が見つけた主観だけが正しいかのような錯覚に囚われます。

私は陰陽調和を知ってから、色んな食材で、陰性と陽性の調和を計ろうと調理してきました。

「調理」とは物事の道理を調べる事。です。

食だけでなく、視野を広げると、いいものも悪いものも存在して然るべきなのだなと思います。まだまだ未熟で、つい主観的に物事を判断しがちですが、これからの長い人生、この捉え方に出会えたことは、私にとって、とても大きな発見であり、人生を楽しく生きていく糧になる気がしています。

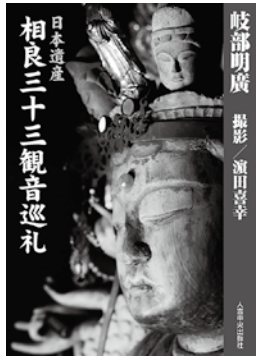
食や自然界から学ぶ事はまだまだ山のようにあります。

この土地に感謝し、日々の気づきにワクワクしながら生きていけたらと思っています。

【うらかわ・はるか／人吉市「さんぽカフェオーナー」】

さあ、巡礼の旅に出よう。

相良三十三観音と人吉球磨の「日本遺産」を熱く語ったずしりと重いガイドブック



■A5 判／上製／400 頁
■定価 2,100 円（税込） 送料 200 円

〒868-0015
熊本県人吉市下城本町 1436-4 の 3 号
TEL・FAX0966-23-3759
人吉中央出版社 info@hitoyoshi.co.jp

くまがわすじの考古地誌

（11）

球磨川筋の弥生時代⑪

木﨑康弘

（NO.172）

地域の分立と「肥後」域

弥生時代中期中頃において、中九州が一つの地域として分立したということは、本連載一〇でも取り上げたことなのだが、後に肥後と呼ばれることになる地域の成立を暗示させてくれる歴史的な事実だったと評価される。そのことを暗示させた発言を、元國學院大學教授で、免田町（現・あさぎり町免田東）出身の乙益重隆が行っていた。

「やがて中期の終りごろから後期になると、熊本県一帯には独特なすがたをもった土器文化が発達しました。熊本市黒髪町濟々黌高等学校から発見された、黒髪式土器もその一つ」

写真①　乙益重隆

それが、この一文で、一九五四（昭和二九）年に日本談義社から出版された『肥後上代文化史』（文献①）の中に認められていた。そして乙益が下した、黒髪式土器への歴史的な評価を、中九州で「独自色を示す土器様式が初めて登場」したことと評して、筆者も、『くまがわ春秋』一六の「くまがわすじの考古地誌一〇　黒髪式土器が語るクニの成り立ち」の中で、次のように記したのだった（文献②）。

「あたかも地域が分立し始めたかのような、さらに言えばクニが静かに成り立ち始めたかのような、そんな動きの象徴」

肥後国は、云うまでもなく明治維新以後使われ始めた熊本県の旧国名だ。その成り立ちは古く、古代の国郡里制の下に設置された国だった。『日本書紀』の中における、その初見は、推古天皇一七年夏四月条で、六〇九年。ただしこれは、あくまでもイレギュラーな記事。次の二点の事実から、

図①　古代の諸国と肥後

表　肥後用例一覧

『日本書紀』の主な記録

推古朝（554～628）
609年　推古天皇17年夏4月の条
「百済僧道欣・恵弥為首一十人・俗七十五人、泊于**肥後国**葦北津」

斉明朝（655～661）
657年　斉明天皇3年7月の条
「丁亥朔己丑、覩貨邏国男二人女四人漂泊于筑紫」
660年　斉明天皇6年春正月の条
「壬寅朔、高麗使人乙相賀取文等一百余、泊于筑紫。」

天智朝（（662～）668～672）
665年　天智天皇4年秋8月の条
「於筑紫国大野及椽二城。」
672年　天智天皇10年11月の条
「沙門道久・筑紫君薩野馬・韓嶋勝娑婆・布師首磐四人」

天武期（673～686）
683年　天武天皇12年12月13日の条
「遣諸王五位伊勢王・（中略）・工匠者等、巡行天下而限分諸国之境。然、是年不堪限分。」
684年　天武天皇13年10月3日の条
「遣伊勢王等、定諸国境。」

持統期（（686～）690～697）
696年　持統天皇10年夏4月の条
「戊戌、以追大弐授伊予国風速郡物部薬与**肥後国**皮石郡壬生諸石」

その頃に肥後国が設置されていたとは、思われない。

第一点は、六〇九年以後、持統天皇前までの記録の中に、肥後国が使われていないことだ。第二点は、その段階で筑紫国が筑前国と筑後国とに分国されていなかったことだ。それは、斉明天皇三年（六五七年）秋八月条、同六年（六六〇年）春正月条に「筑紫」とあったり、天智天皇四年（六六五年）八月条に「筑紫国」とあったり、同一〇年（六七二年）一一月条に「筑紫君」とあったりなどから、そのように思われるのである。

では本来の初見はどれか、というと、持統天皇一〇（六九六）年夏四月条として記されていた「肥後國皮石郡壬生諸石」の記録だろう。つまり、肥国は、七世紀後半に肥前と肥後に分国されたものと思われるのである。それは、天武天皇一一（六八三）年一二月一三日条の「遣諸王五位伊勢王・（中略）・工匠者等、巡行天下而限分諸国之境堺。然、是年不堪限分。」や、天武天皇一三（六八四）年一〇月三日条の「遣伊勢王等、定諸国堺。」の記事が指示しているのではないだろうか。そうだとすれば、肥後国の設置は、天武期の、六七三年から六八六年までのことと考えることができるはずだ。

黒髪式土器の登場は、中九州で「独自色を示す土器様式が初めて登場」した出来事だった。言わば、「あたかも地域が分立し始めたかのような、さらに言えばクニが静かに成り立ち始めたかのような、そんな動きの象徴だった」、と評価できるのではないだろう。そしてまた、このぼやっとした地域性の萌芽こそが、ここでいうところの「肥後」域の先駆けであり、後の「肥後国」に繋がるものであったのではないだろうか。

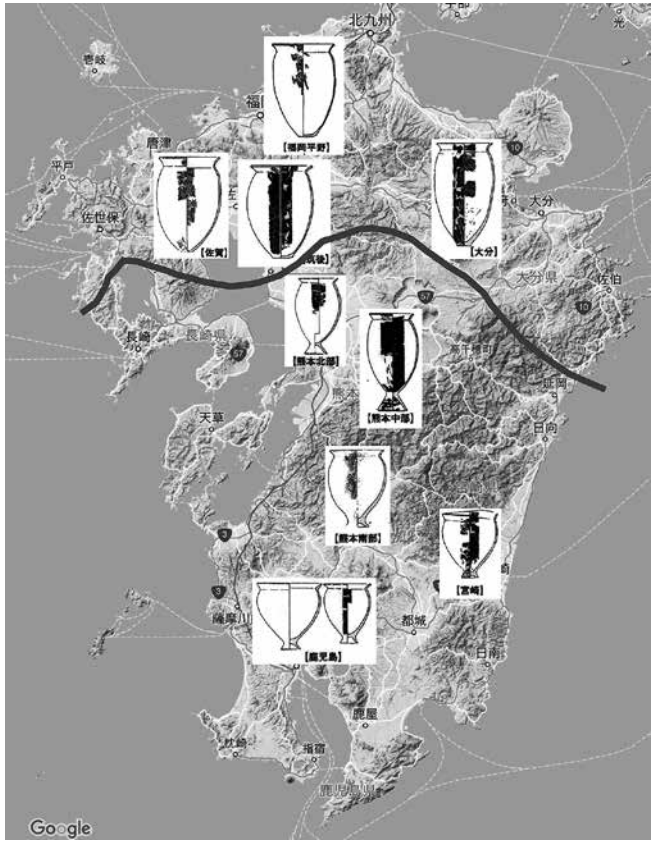
黒髪式土器を受けて成立したのが、底に脚台を付けた甕形土器であり、それを使った人びとが生きた弥生時代後期の熊本であった。この頃になると、「肥後」域は、さらに明確に浮かび上がった。その考古学的な現象が、檀佳克の示した丸底甕と台付甕の分布傾向ではなかろうか（「土師器の編年①　九州」『古墳時代の考古学』1、同成社、二〇一一年）。

そこに示されたものは、九州が甕形土器の底の特徴から、明確に二つに分けられるということ。一つ目は、現在の長崎県北半部から佐賀県、福岡県、大分県にかけて分布域がある丸底甕、二つ目は、その以南に分布域がある台付甕。甕の底の特徴から、九州は、大きく二分されたのである。

次に後期でおきた台付甕の分布する地域（以後「台付甕分布域」という。）での分立もまた重要な考古学的現象であろうと評価される。それを惹き起こしたのが重弧文土器の出現だった。

重弧文土器は、ソロバン玉の形をした胴に筒状の長頸を付けた独特な形をし、胴の上半分を横線文や重弧文などの複雑な文様で飾った土器である。あさぎり町免田の本目遺跡で見つかった土器から、この土器を特に免田式土器と呼ぶこともあった。この土器の分布を見てみると、一部川内川上流域や大淀川流域にもみられるものの、濃密に分布するのは、白川流域と緑川流域、そして球磨川流域であることがわかる。ただし、菊池川流域でも、ほとんど見られないことも重要な傾向である。この台付甕分布域での分立こそ、「肥後」域の成立と評価することもできる。

（つづく）



図②　弥生時代後期の九州　丸底の甕が分布する地域と台付の甕が分布する地域の二つに分かれていた。

文献①　乙益重隆『肥後上代文化史』（日本談義社、一九五四年）
文献②　木﨑康弘「くまがわすじの考古地誌一〇　黒髪式土器が語るクニの成り立ち」（『くまがわ春秋』一六、二〇一七年）

北御門二郎生誕１０４年記念『続・トルストイ短編集』より

二人の兄弟と金貨

レフ・トルストイ／作
北御門 二郎／訳

昔昔、エルサレムの近くに二人の兄弟がいて、兄をアファナーシイと言い、弟をイワンと言った。二人は町の近くの山の中に住んでいて、人々から恵まれるものを食べて暮らしていた。二人は毎日仕事をしていた。それも自分のための仕事ではなく、貧しい人々のための仕事だった。手に余る仕事で困っている人とか、病人とか孤児とか寡婦とかがいれば、二人はそこへ行って、謝礼金も貰わずに働いたり、世話をやいたりした。そんな風に二人は一週間別々に働いて、土曜日の晩やっとわが家へ帰るのだった。そして日曜日だけはわが家にいて、お祈りしたり、語り合ったりした。天使も舞い降りて来て、二人を祝福するのだった。月曜日には、二人はそれぞれ、自分たちの目的地へと別れて行った。

二人は長いことそんなにして暮らし、天使が毎週降りて来て、彼らを祝福するのだった。

ある月曜日の朝、二人が仕事に出て、もう別方向へ別れかけた時、兄のアファナーシイは愛する弟と別れるのが辛くなって、立ち止まって弟の方へ振り返った。イワンは自分の行く方向へ頭を下げて歩いていたが、兄の方を振り返りはしなかった。ところが突然イワンも立ち止まり、何かに気づいたかのように、手をかざしてじーっとそちらを見つめていた。やがてその見つめていたものに近づいた彼は、突然ぱっと飛びのいて、まるで猛獣に追っかけられてでもいるように、山を駆け下り駆け上りしてそこから逃げて行った。驚いたアファナーシイは、一体何を弟はあんなにこわがったのかを確かめようと、その場所へ戻ってみた。そばまで行ってよく見ると、何かが日光にきらきら輝いている。もっとそばまで行ってみると、草の上に枡からこぼしたように金貨の山があった。その金貨を見るとアファナーシイは、どうして弟が飛びのいたのかと、ますます驚いた。

《何をこわがったのだろう？ 何で逃げたのだろう？》とアファナーシイは思った。《金貨に罪はない。罪は人間にあるのだ。お金では悪いことも出来れば良い事も出来る。これだけの金貨があれば、どれだけの孤児や寡婦を養え、どれだけの人に着せ、どれだけの身体障害者や病人を治療することが出来ることだろう！ 私たちは今人々に奉仕しているけれど、私たちの力が少ないから奉仕も少ないが、これだけの金貨があればもっともっと奉仕できるだろう》アファナーシイはそう思って、弟にそう言おうと思ったが、イワンは既に声の届かぬ所へ行ってしまって、向こうの山にまるで甲虫のように小さく見えているだけだった。

アファナーシイは上衣を脱いで、それにかつげるだけの金貨を包み、よいしょと肩にかついで町へ向かった。旅館に着くと彼は、その金貨を旅館の主人に預けて、残りの金貨を取りに行った。金貨を全部持ってくると、こんどは商人たちの所へ行って町の土地を買い、石や材木を買い、労働者を雇って家を三軒建てはじめた。アファナーシイは町に三ヶ月いて三つの家を建ててしまった。一つは寡婦や孤児のための家で、もう一つは病人や身体障害者のための病院で、更にもう一つは巡礼や乞食を収容する施設だった。それからアファナーシイは、信仰深い三人の老人を見付けて、一人は孤児たちのための家の、もう一人は病院の、更にもう一人は、巡礼や乞食の収容施設の管理人にした。それでもまだ三千枚の金貨が手許に残った。そこで彼は、三人の老人にそれぞれ千枚の金貨を渡して、貧乏な人たちに手渡すようにと言った。すると三つの家は大勢の人で溢れ、みんなアファナーシイの行為を賞めそやすのだった。アファナーシイはそれが嬉しくて、町から出て行きたくなくなった。でもアファナーシイは、自分の弟を愛していたので、みんなにさようならを告げて、金貨一枚も持たず、着物も町へ来た時のままの古い着物を着たまま、自分の住家へ帰って行った。

アファナーシイは自分の住む山へ帰りながら考えた。《金貨を見て飛びのいて逃げ去った弟は間違っている。私の方がうまくやったではないか？》と。そう考えたとたんアファナーシイは行く手に二人を祝福していた天使が立って自分を睨

み付けているのが見えた。アファナーシイはびっくりしてただ《天使様、どうしてここに?》と言うだけだった。すると天使が言った。《ここを去れ、お前は弟と一緒に住む資格はない。弟が金貨を見て飛びのいたというひと事が、お前が金貨で以てやった数々の仕事よりずっと尊いのだ》と。

アファナーシイは、自分がどれだけの巡礼や貧乏人たちに食わせたか、どれだけの孤児を養ったかを語った。すると天使が言った。《その金貨を置いてお前を誘惑し、お前にそんな事を言わせるように仕向けたのは悪魔なのだ》と。

そこでアファナーシイの良心がめざめ、自分がやったことは神様のためでなかったことを悟って泣いた。

すると天使が道をあけ、そこにイワンが立って自分を待っていた。それ以来アファナーシイは金貨をこぼしておいた悪魔の誘惑には陥らず、お金でなく自分の労働でのみ神と人とに奉仕出来ることを悟った。

そして二人の兄弟はもとのように暮らすようになった。

（一八八五年）

一九九二年一月二日訳了

寓意に満ちた短編11編を
北御門二郎の「心訳」で贈る
心に響く短編集

北御門 二郎・訳
続・トルストイ短編集

新たに編集された「蠟燭」「とびこめ!」「三人の息子」「悪魔はしつこく、神は殺し」「二人の兄弟と金貨」のほか 11 本編を収録

レフ・トルストイ／作
北御門 二郎／訳
表紙絵／藤さやか
北御門すすぐ・たえ子／編

■A5 判／並製本／184 頁
■定価 1,500 円（+税）
送料 100 円

直販の申込は 北御門家 FAX 番号 0966-46-0255 へ

〒868--0015 熊本県下城本町 1436-4 の３号
TEL・FAX0966-23-3759 info@hitoyoshi.co.jp 人吉中央出版社

伊勢戸 明 著（企画＝人吉球磨総合研究会）
くま春秋
――人吉・球磨を見つめつづけて
発行・人吉中央出版社
発売・風行社

ふるさとの出来事と人物に出会える一冊

長年にわたり地方紙の記者として政治、文化、教育など、幅広い分野から情報を発信した著者の珠玉のコラム集。14年間「週刊ひとよし」の巻頭を飾ったコラム370本を精選した一冊。

カバー写真／山口啓二

●収録コラムにはすべてタイトル付き
●事件や地域のできごとのその動きや、方言説明などをコラム末尾に注記
●巻末に人名索引、コラム掲載号一覧

■A5 判／上製／400 頁
■定価 2,100 円（税込）
送料 200 円

通販申し込みは下記へ

※代金は、同封する郵便振替用紙でお支払いください。

伊勢戸 明（いせと あきら）［1932～2010］
朝鮮・京城（現ソウル）生まれ。新聞記者・コラムニスト。大分新聞社を経て、1958年、熊本県人吉市にて『日刊人吉新聞』を創刊。38年にわたり連載コラム「瀬音」執筆。同社を退職後、1997年『週刊ひとよし』創刊。以来14年間、巻頭コラム「くま春秋」を執筆。地方紙記者の枠にとどまらず、この地方の文化・教育活動などにも広く、深く、関わった。

お問い合せ 人吉中央出版社 〒868-0015 熊本県人吉市下城本町 1436-4 の３号
TEL0966-23-3759・FAX0966-23-3759 info@hitoyoshi.co.jp

くまがわ春秋歌壇

いもご短歌会

夏来れば川へ魚を採りし日を遠く思えり少年のころ
戦時下の日の丸弁当梅の実は相手にされず主なき庭に
三原 竹二

雨上がり水かさ増した球磨川のよどみに休む釣り人の舟
遅咲きと葉かげに咲いたあじさいのうす紫に暑さ忘るる
坂本 ケイ

舗装路に這いだすみみずをはさみとり畑地にそっと返してやりぬ
香あげて遺影の皆に語りかく今日一日を見守り給え
上田 廸子

銀色の傘を求めしこの夏も異常気象を憂いて過ごす
欲っせずも水は度々飲むように念を押したり一人居の父に
宮川しのぶ

雨蛙しきりに鳴いて姦（かしま）しい天が怒りて大雨降らす
朝起きて梅干しを食べその次に甘酒を飲み元気はつらつ
吉岡 弘晴

傲慢なるアベの行く末見えて来し自民惨敗に深夜の乾杯
都議選に惨敗したるも改憲の行程変えずと首相うそぶく
上田 精一

俳句大学
Haiku University

今月の秀句
Selected Haiku of this Month

永田満徳選評・向瀬美音訳

このコーナーは、「二行書きによる〈切れ〉と〈取り合わせ〉を取り入れたHaiku」を提案している『俳句大学』facebookページからの転載です。

https://www.facebook.com/groups/1805562046390300/

Haiku Column ❻

Lilou
●
a dragonfly on my room window
blue sky his eyes
【Commented by Mitsunori Nagata】
La libellule est sur la fenetre. En fixant les yeux de la libellule qui reflete le ciel bleu on voit la penombre de la chambre

リル
●
部屋の窓にいるトンボ
目の中の青空
〔永田満徳評〕
外と内との境にある窓にいるトンボ。明るい青空を宿しているトンボの目に焦点を当てることによって、部屋の暗さを際立たせている。

Angiola
●
ortensie blanche
l'ombre pesante della piogga
【Commented by Mitsunori NAGATA】
les hortensia en fleurs semblent tres lourds. c'est remarquable de regarder l'ombre de la pluie. le contraste du blanc et du noir penetre son regard et touche sa sensibilite

アンギオラ
●
白紫陽花
重たげな雨粒の影
〔永田満徳評〕
萼が大きく発達した紫陽花はいかにも重そうである。雨粒の影に注目したところがよく、紫陽花の白と影の黒との対比が鮮やかである。

Joelle
●
vieil ermite
seule son ombrel'accmpagne
【Commented by Mitsunori NAGATA】
il s'agit du bernard l'ermite qui traine avec son vieux coquillage. on voit la sensibilite et leregard aigue du poete.

ジョエル
●
古いヤドカリ
その影だけがついてくる
〔永田満徳評〕
ヤドカリが借りている古い殻を引きずりながら移動しているさまである。その様を影までも付き従っていると見たところに感覚の冴えがある。

【7月号の訂正】２番目の句評
leur parapluie → leur parapluies

【ながた・みつのり／俳人協会会員、熊本市】

柳人があじわう漱石俳句
―⑰―

いわさき楊子

鶏頭や秋田漠々家二三
（漱石28歳）

鶏頭花の異様なかたちと毒々しい赤色は、人を黙らせる威圧感がある。上五にこれを持ってこられたらことば少なに景色にもどすしかない。荒涼とした秋田との対比で句が成っている。

「鶏頭の十四五本もありぬべし　正岡子規」という有名な句があるが、これは鶏頭だけを述べて絶対的な存在感を詠んだ。

そして黄色の鶏頭を詠んだ次の句もある。

鶏頭の黄色は淋し常楽寺
（漱石28歳）

月並句だが、先の句を読んだ後にはより淋しさがただよう。

御かくれになつたあとから鶏頭かな
（漱石45歳）

明治天皇崩御のあとに書かれたもの。奉悼の句とはいえ、赤赤しい鶏頭を切れ字ですえているところは俳諧味がある。小説に追われる日々を過ごしていた時期ではあったろうが、俳句は楽しみとして続けていた。

川柳では、対比や取り合わせの妙だけではなく、さらに切り札を叩きつけて「どうだ」と迫る場合がある。季語らしきものが入っていてもあくまで生の人間が主体だ。もちろん皮肉は常道。

カンナ燃ゆ生命保険解約す
タワシにもお葬式にもあるランク

【いわさき楊子（ようこ）／川柳誌「裸木（らぎ）」編集人、熊本市】

球磨村神瀬付近

十歳の少年が見た「西南の役」㊦

馬場光俊

この西南の役の記録は当時十歳であった「木屋梅吉氏」より聴聞集録したものである。

集録者　熊本県師範学校同期
　　故・上原俊彦氏
　　現・馬場光俊（文責）

集録の目的
　　学校よりの課題
　　「郷土研究」

ある日、恐ろしい目にあった。それは水桶がなくなったので、家の者がかくしたものと思ったのだろう。出さぬかといって、西隅の床柱に刀で切りつけた。どんなにあやまって探し出したか判らなかった。今もその刀のあとが残っている。

※戦後家を新築し、その床柱も手ばなしてしまった。

○段村（八代郡段）の○○討首の件。

○○は箙瀬（えびらせ）で捕えられて来た。その親戚にあたる二十才位の若者も一緒だった。

○○は四、五十位の年令で百姓であった。八代附近から薩摩が退いた後、官軍より早く二人がやってきたのが怪しまれ、いろいろ尋問してみると、二人は「卵売り」といっていたが、とうとう最後には口を割った。

それは、官軍からいくらかの金を貰って、この薩軍のいる村を焼打ちに来たと打ち明けた。

遂に二人は討首になった。

その時の様子は、現在旧神瀬小学校の川原の芝原で、薩摩兵が取り囲み村人達も遠巻きに眺めていた。

後手にくくられ、髪をかきあげ、鉢巻で目かくしをされていた。

土色に変わった死の寸前の姿を見てぞっとするようだった。

二人は次々に腕ききに切られて死んでいった。

ふるえながら見ていたあの時の様子が心に焼きついて離れない。

【ばば・みつとし／球磨村】

鶺鴒（せきれい）短歌会

七月詠草

雨誘ひ七色に咲く紫陽花は雨の降るなか鮮に映ゆ
いにしえに民は隠れて御仏を祈り続けて仏の里に
守永　和久

つばくらめ去年の古巣を繕ひて育せし雛の鳴き声高し
我が家の錆の進みし鉄骨をクリーム色に塗りて安らぐ
河内　徹夫

園児よりカーネーションを頂きぬ今日は母の日七十回忌
千里ケ浜なぎさドライブ眼下には白き砂浜青々の海
中村美喜子

高音（たかおと）の激流下る筏群れ浮きつ沈みつ筏師の技
裏山にくちなし咲くと妻の声玄関飾る人も麗し
西　武喜

二十年病に耐えたる亡兄（にい）さんにただ「ありがとう」のみの言葉で
「一才なり」古き写真に吾がことが戦地の父への手紙の中に
釜田　操

県ざかい尾瀬に咲きたる水芭蕉湿原遠くへ続く木道
寂しさよ同級会の集まりに残れる友は年ごと減りて
緒方　保正

免許証返納しようかと悩む夫に更新進めど吾も悩まし
雪の日も散歩したいとせがむ夫「待って待って」と空をながめつ
中原　康子

わが町の公園の草刈り終へば疲れも暑さも吹っ飛びにけり
同期生親睦兼ねてゴルフする笑い絶えずに時を忘れて
三原　光代

葉ワサビは山菜の雄その風味求めて夕餉は酒の肴に
八十路越えガーデニングもままならず唯に紫陽花のみが輝き
橋詰　了一

リハビリで歩く姿の妻の脚弱々しきが唯に寂しき
放置田に雉（キジ）棲みつきて吾が郷は夜明けと共に雉キジの声
堀田　英雄

倉敷便り ⑧

人吉海軍航空隊の航空機と特攻隊員

原田 正史

昭和十九年九月頃には、通称「赤トンボ」と呼ばれる初級練習機が五、六機配備されていて、十人ほどの隊員が訓練を受けていました。もちろん滑走路は未完成であり、東端部だけが完成していました。

まず教官が、隊員の見守る中で急降下をやって見せます。上方から垂直に降下した教官の赤トンボは、地面すれすれまで接近し、土煙を巻き上げながら反転上昇し、去ります。地面に激突するのではないかと思える程のすさまじさであり、見事な腕前です。次は隊員たちの番であり、次々と飛び上がり、教官の前まで来て急降下するのです。しかし地面から二、三十m付近で反転上昇してしまい、教官のように地面すれすれまで急降下することは出来ません。

訓練終了後、教官の前に一列に並ばされた隊員たちは「貴様ら、何をやっているんだ」という怒声と共に、教官によって次々に地面に叩き倒されました。見事な倒れ方でした。こんな時に下手に立ったままでいると再度の鉄拳に見舞われるのです。

ある日のことでした。飛行場の南側にある集落の上方を飛んでいた赤トンボのエンジンが急に停止しました。異変に気付いた多くの人たちが見守る中で、機体が軽い赤トンボは急速に落下することはなく、左右に機体を揺すりながら、ゆっくりと落ちて来て、集落の柿の木に引っかかったのです。地面に激突することを免れたことから乗員も無事で、機体の損傷も軽微でした。

赤トンボを見ることが出来たのは僅かの期間であり、隊員もろともいつの間にか何処かに消え去りました。

滑走路東端部の北側にある二つの格納庫の前には、木製の頑丈な台座に載せられた夜間戦闘機「月光」が、緑色の端麗な姿を見せていました。

学習用に設置されたものと思われます。さらに滑走路東端部の東側にあった丘の上には零戦と、見るからに旧式そのものといえる角張った布製の輸送機が置かれていました。零戦からは機銃だけが取り外されていました。太平洋戦争の初期には操縦性能の優れていた零戦でしたから大活躍したのですが、重戦闘機と呼ばれ、機関銃を搭載したグラマンなどの機種が登場すると機銃しか持たない零戦では全く勝負にならなかったのです。

無用の長物と化した零戦には見張りも付けられず、鍵さえ掛けられてはいませんでした。休みの時間になると風防を引き上げて操縦席に座り、操縦桿を使って尾翼などを動かして遊んだものでした。

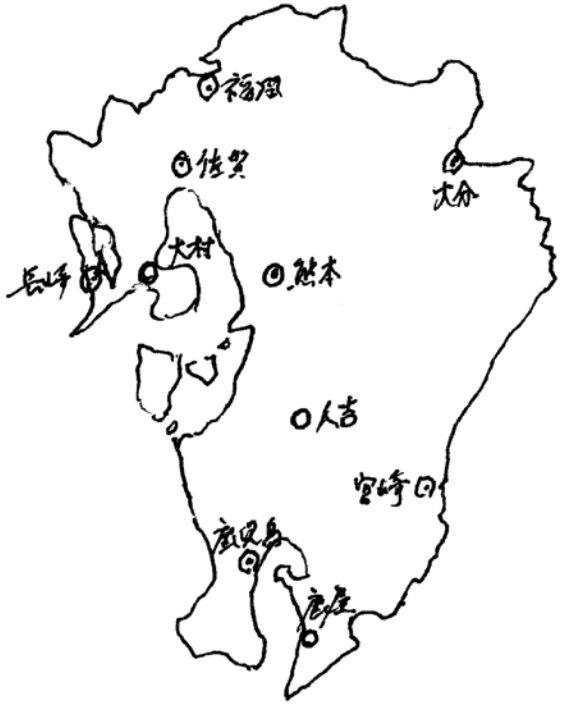
その後のグラマンによる空襲によって、夜間戦闘機月光は二つの格納庫と共に消失してしまい、二度とその美しい姿を見ることは出来ませんでした。零戦については正確な情報を持ちませんが、恐らく空襲によって破壊されたものと思われます。

ここで格納庫建設工事にまつわる話にふれておく事にします。格納庫は高い建物ですから屋根の工事には熊本市の鳶職八木組が当たりました。八木組の組頭は代々八木寅吉と名乗っており、略して八木寅と呼ばれていました。前々から地元でサーカスなどがある時には必ず八木組が小屋掛をしていました。何代目かは知りませんが、八木寅さんが配下の組員を大型トラックに乗せてやって来ました。組員は一斉に格納庫の上部に登り、下から八木寅さんの指示に従って作業を開始しました。前後左右に渡された細い梁の上を平然と動き回るのです。もちろん命綱などはなく、落ちたら即死でしょう。高所恐怖症の私には、長く見続けることさえ出来ませんでした。

ある時、見回りに来た海軍士官と八木寅さんが、作業上の見解が一致しないことから言い争いになりました。「全員降りろ」という八木寅さんの大声に従い、組員は格納庫の屋根から飛び降りて、トラックに乗り込みました。これを見て青くなった海軍士官は、八木寅さんに謝り、事なきを得ました。当時、暴力団でさえ怖がる存在だった軍隊に、平

然として立ち向かった八木寅さんだったのです。九州男児というのはこんな人のことを指すのでしょう。

どんな経緯があったのかは不明ですが、同級生五、六人が八木寅さんから直接話を聞くことが出来たそうです。一人が「どういう事から八木組の組頭になられたのですか」と聞いたところ、スクッと立ち上がった八木寅さんは、「これを見ろ」と上半身裸になったそうです。その上半身のいたるところには大小様々な刺し傷や切り傷の跡が残されており、余りにも凄惨な事実を目の当たりした同級生たちは絶句したそうです。



この頃になると日本の制空権は完全に米軍の手中にあり、都市の攻撃には、陸上基地から重爆撃機B29が編隊を組んで飛来し、個別的には艦載戦闘機グラマンが、単機的にあるいは数機で思うがままに攻撃したのです。

日本の基地に僅かに残っていた飛行機は、空爆が予想されると別の基地に移動され、あちらこちらと逃げ回っていました。空襲の前には必ず偵察用のB29が高高度で飛来し、目的地の真上で旋回して帰ることから予測出来たのです。

人吉海軍航空隊の飛行場にも、海軍の特攻基地であった鹿児島県の鹿屋基地から通称「万年筆」と呼ばれていた爆撃機が十機ほど逃げて来たことがありました。この爆撃機は、機首と尾部が丸くなっていたことから万年筆と呼ばれていたのですが、正式な名称が何であったかは思い出せません。万年筆は休む間もなく滑走路横の土の面に擱座した一機を残して、長崎県の大村基地を目指して飛び立ちました。残された一機も数日後にはいなくなりましたから、損傷した尾部の車輪を修理してもらい飛び立ったものと思われます。

時には紫電改や、陸軍の呑龍などが不時着することもありました。いずれもプロペラの中心部に機関砲の銃口があり、威風堂々たるその姿は実に見事でした。一度だけですが、六機ほどの紫電改が爆音を轟かせながら私たちの上空を編隊を組んで飛び去るのを見たことがあります。

人吉海軍航空隊には、十人ほどの特攻隊員がいました。海軍の特攻基地である鹿屋から出撃があると、彼らは直ちに鹿屋へ向かい、その後は、新しい特攻隊員がやって来るのです。人吉は一時的な中継基地であり、訓練などは全くありませんでした。隊員の宿舎は、千敷原東端崖基部に連続的に掘られた洞窟で、一人に一個ずつ与えられていました。洞窟の前にはグラマンによる機銃掃射を防ぐための土嚢が積まれ、その近くには打ち込まれた銃弾の弾痕がいくつも認められました。また周辺の樹木の先端部は、掃射によって飛び散り、箒状になっていました。

私たちは時々、休みの時間に洞窟を訪れ、隊員と他愛のない話をしたものです。隊員のほとんどが二十歳前後の学生であり、私たち中学生の話もよく理解してくれました。帰る時間になり、「失礼します」と立つと、隊員は私たちの狙いが何であるのかを承知していて、ミカン箱一杯に詰められた甘味料の中から飴玉を取り出して与えてくれました。民間には甘いものが全くありませんでしたから、飴玉を口に入れると至福のひとときがやって来るのでした。

隊員の顔色は一様に土気色であり、人間の顔ではありませんでした。確実に迫り来る死を直前にして色々と思い悩んだことと思われます。当時、血気盛んな少年時代だった私たちには、その心情を思いやることは出来ませんでした。今にして思えば家族の事や恋人の事など頭の中から消えることは無かったはずであり、哀れの一語に尽きます。特攻という名目のもとに短い一生を終えられた隊員の皆様のご冥福を心より祈念申し上げる次第です。

【はらだ・まさふみ／元人吉市文化財保護委員、倉敷市】

方言を味わう⑭ ―クイズつき

庚申講の夜

前田一洋

○あな恐ろしや

私が学校を退職し、人吉市田野町に住むようになった平成七年頃まで、ここには珍しい「庚申講」というのがあった。六十日毎に巡って来るカノエサルの晩に、講つまりグループの人達が集まり、一夜を過ごすのである。

「なんだりご馳走はなかですいどん、来ならんですか」のお誘いを受けたので、暮れやを待って喜んで出掛けた。講元の元田宣男さん宅の座敷に上がると、床の間に奇妙な掛け軸が掛けられ、豆腐が一丁供えられていた。

「しんから見てよかですどか」「そん絵ば見たもんで、バチかぶったもんなおらんで、存分見なってよかですばい」との快諾を得、隅から隅まで眺めさせてもらった。中央には庚申信仰の本尊である「青面金剛」が、左右の足で赤青の鬼を踏んづけて立ち、両側に童子を従え、前には三羽のヒヨコと番いの鶏。

全身まっ青な本尊は、天を突く怒髪に眼が三つの憤怒形。一頭分の虎の皮で仕立てた猿股パンツは時価にすれば相当な代物。やや筋肉質の体躯には手が六本と二本の足。しかも手足の首には生きたヘビのブレスレットを。

そうした贅沢な腕輪を着けた手に持っているのは、右上から宝輪、宝弓、そして人間の女の髪毛の先端をつかんでぶら下げている。左側の手には三叉の槍、宝剣、宝矢を持つ。また左肩から右の腹にかけ、衲衣とは思えぬ高価なシルクの布を巻いている。

さらに良く見ると首には人間のドクロで作ったネックレス、まことに趣味が良い。その頭の後には、火炎をともなった円盤の光背。足に踏まれた鬼どもは、「ゆうとヌスこっじゃなかにゃ」とグドつきながら耐えている。

○根強い信仰の裏には

「かねては、どぎゃでっちゃよかですいどん庚申の晩ににゃ、横寝はしたっちゃ人ごとァ言うな、ちゅうてあっですもん」。なるほどそう言われてみれば、村のトラブルメーカのオバタリアンの口からも、「聞いたな向かいのアネさんたい」とか、「ここばかっの話じゃっで、だれだり言いなんなよ」の前置きがなくて、黙ってトウフを口に運んでいる。

「庚申縁起」によれば、人の体内には上中下の「三尸」という虫が棲んでいる。これが庚申の晩になると、人が寝ている間に抜け出して天帝のところに行く。そしてお世話になっている宿主の悪口を言うのだ。また単細胞のビンタしかないのであろうか、その天帝が申すには、「えーそぎゃの粗末かとや、なっばネヲらせろ」「大ケガさせっろば」「エンマ大王がとこれ、追いやれ」と。

哀れなるかなその判決を受けた者は、たちどころに病気をしたりケガしたり、ギメに蹴られて名誉の戦死を遂げることに。そこで、そうした〝神災〟を避けるため、あなたならどうする。そうです、寝ずに起きていればよいのだ。ただ一人では眠気がさすので、くだんの講を作って、お経を上げたり語ったり。

それを一番鶏が鳴くまで続けると、その後は翌日になるので家に戻って寝てよいのだ。

明治になるまで、こうした信仰が球磨・人吉地方には根強く残っていた。その証拠が、村の辻や道端、お堂の境内などに建っている「カナエさん」「カネサイどん」などと呼ばれる庚申塔。これが七百基余りもあるのだ。ところが私共が熊本市の文化財調査で、三年がかりで見付け出したのは、たったの九基。

その違いは果して何なのか。もしかしたら真宗禁制の厳しかった相良領内では、こうした講をうまく利用してその隠れ信仰や布教が行なわれていたのではとも思われるのだが。

では三択クイズ。

- **バチかぶる**　鉢をかぶる・天罰を被る・火鉢にあたる
- **グドつく**　お寺の鐘を撞く・大量の米を搗く・不平を言う
- **アネさん**　お嫁さん・未婚の女性・未亡人
- **ネヲる**　木の根を掘り起こす・病気する・折り紙
- **ギメ**　偽りの名前・バッタ・片足跳び

【まえだ・かずひろ／人吉市】

上杉芳野の「あがっ段」⑮

供養、その三

育ての親 母ちゃん

私を産み、産後の肥立ちが悪くて、一歳一ヶ月の私を残して他界した実母の名は「房野」。その後、周りの人のお世話で嫁に来てくれたのが最近他界した「元野」。そして私は「芳野」。

名前からして縁があり通じ合っていた様に思う。小さい頃は母ちゃんの言うこと、することが怖くて恐ろしくて、子供ながらに出て行こう、死のう、と何度思ったことだろう。

でも中学を卒業して集団就職列車で働きに出て、ふる里を後にした時、私は思った。私がこうして今現在、生きているのも母ちゃんが育ててくれたからだと。

朝早く起きて、朝から晩まで立ちずくめで、朝から米の少し入ったカライモや野菜の多いズシを作り、ご飯がない時はそば粉をお湯で練ったものに醤油を掛けて食べさせてくれた。

学校から帰るとカライモと里芋の炊いたのをショウケに入れてぶら下げてあった。腹が減っていた私はそれを喜んで食べていた。

遠足や運動会の時だけは米だけの飯を作ってくれた。「うぁ～白ん飯だ～！」と嬉しくてたまらなかった。

何かお祝い事があると必ず混ぜめしを作ってくれた。今みたいに鶏肉などは入ってなかったが、ゴボウ・椎茸・人参、竹んこ・アゲと、いろんな具が入っていてとてもうまかった。その味が忘れられなくて今でも私は作っている。だから子供や孫達も喜んで食べてくれる。

今は洗濯機や乾燥機があるが、あの頃はギザギザした洗濯板でゴシゴシ洗い、川ですすいで干していた。冬はコチンコチンに凍ってツララが下がっていた。陽が照り始めると、その洗濯物から湯気が出ていた。真っ赤になった手を母ちゃんは、息を吹きかけ暖めていた。どんだけ冷たかっただろう。

昭和43年、母と父（45歳）と私（18歳）

小さい頃の嫌な思い出は母ちゃんが私たちに与えてくれた優しさを思い出していくたび、一つずつ消えていく。

私の心の中には、された嫌な思い出より、してくれた優しい思い出の方が強く残る様になった。運良く近くに嫁にいき、母ちゃんと接することが出来た。

我慢強くて働き者の母ちゃんも、父ちゃんが他界し一人暮らしとなった。時には母ちゃんの家の掃除をしてあげようとすると、「すんな、おいがすっで」と何でも自分一人でしてしまう母ちゃん。

そんな母に「母ちゃん、冬はぬっか服、夏は涼しか服ば着らんばんよ。ずーっと同じ服は汚なかし、見ぐるしかばい」というと、「どぎゃーあっか、わいもこぎゃーなっとぞ」と私に言った。

それに、「歌うたり踊ったりすっとは、私の娘ですもん。わしが産んだっちゃなかばってん、わしが育てたっですたい」と、周りの人達に自慢をしていた母ちゃん。

超人のような、鉄人28号のような、山んばのような、へんちくりんのイガイガどんの母ちゃんに、感謝である。

【うえすぎ・よしの／ボランティア観光バスガール、あさぎり町上】

復刻掲載

字図で見る球磨の地名 ⑯

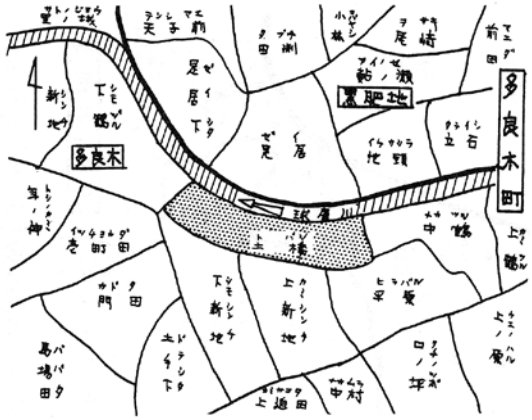
上村重次

【おことわり】本連載は平成6年から9年にかけて執筆されたものの復刻版です。市町村合併前の地名となっていますが、ご了承ください。

土橋（トバシ）

―多良木町多良木―

多良木商店街の北方、球磨川左岸沿い水田地帯の小字が土橋である。



川が村境になっていて右岸は旧黒肥地村で、土橋と向かい合う字是居下（ゼイシタ）には旧村社黒肥地神宮（王宮）が鎮座する。

河川に架かる橋には型式や用材によって眼鏡橋、吊り橋、金橋、板橋、石橋など種々の名称が有り、人の苗字（姓）や地名にも橋を用字するのは珍しくない。土橋という姓、地名も全国に点在するが、土橋とはどんな橋だろう、と考えでみると甚だ分かりにくく、正体不明になってしまう。

小さな川や溝を渡る農道には泥橋（ドロバシ）と俗称される橋を見かけることがある。橋桁の上に柴などを並べ、上を土で覆った粗末な橋である。

しかし、王宮前付近の球磨川は流れこそゆるやかではあるものの、川幅は広く、渡河できるような土橋があったとは考えられない。

球磨地域の市町村字名で橋地名は十七件あるが、橋詰や柳橋で検討したように、ほとんどはムラ境に位置し、区域の端（はし）が橋に当て字されたものと判断される。多良木町宮ヶ野には落橋（オテバシ）という字名がある。文字を見ると橋が流失したか、通行人が落下したのに由来する地名のようであるが、大字黒肥地との境にある小字であるから、村域の端っこの表現であることがわかる（落は村落・村里、橋は端の意）。

字土橋付近の球磨川では渡河機能のある土橋の実在は認められないし、空想や説話の土橋が登場するにしても、区域名称の字名として定着したとは患えない。

熊本県内の他市町村の小字では次の土橋があるが、いずれもムラ境に位置する。

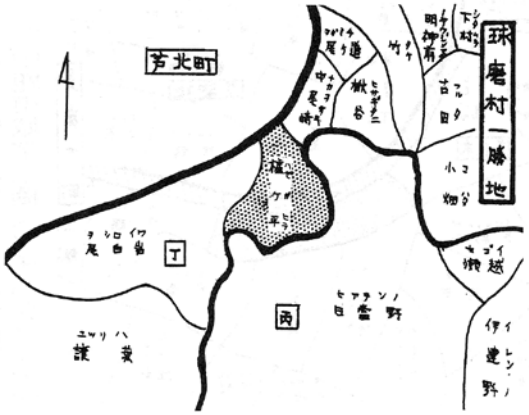
▽山鹿市城字土橋（ツチハシ）＝大字小群との境▽阿蘇郡西原村小森字土橋（トハシ）＝久木野村との境、俵山一帯▽上益城郡益城町馬水字土橋（ドハシ）＝大字惣領、大字安永に挟まれた境地▽下益城郡豊野村下郷字土橋（ツチバセ）＝大字中間との境▽八代市下大野字土橋（ドバシ）＝坂本村境の山▽本渡市楠浦字土橋（ツチハシ）＝未詳▽天草郡苓北町志岐字土橋（ツチハシ）＝大字白木尾との境▽同郡五和町御領字土橋（ドバシ）＝本渡市との境界にある字境松（サカイマツ）の隣。

これらの土橋の訓はトハシ、ドバシ、ツチハシと清音、濁音、和訓の各種があるが、用字が同じであり、境界に位置するという共通点から見て同義地名と言えよう。また土橋の〝土〟は土壌のことではなく国土、領土の〝土〟であって土地区域のことだろうから、土橋は区域の端、すなわち境界の表現と考えるのである。

櫨ケ平（ハゼガヒラ）

―球磨村一勝地丁―

秋の野山を彩るハゼの古名はハニシ（黄櫨）で、略されてハジになり、現代ではハジとハゼが混用されている。



『牧野日本植物園鑑』には「はぜのき（うるし科）関東以西、四国、九州の暖地にはえる落葉木」とある。

ハゼノキは古くから有用樹として利用されてきた。『古事記』には天之波士弓（あまのはじゆみ）、『萬葉集』巻廿の長歌には波自由美が見える。

〝はじゆみ〟は黄櫨（ハゼノキ）で作った弓のことである。現代でも和弓はハゼノキと竹をはぎ合わせて作る。

茶色っぽい和ローソクの原料はハゼの実であるが『和名抄』燈火部に「蝋燭」が出ているので古い時代に製法が伝わったらしい。人々の目を楽しませ、有用木として重宝がられてきたハゼノキであるから、この木に由来する地名もあるように思われる。

球磨地域の市町村字名では一勝地の櫨ヶ平の他に人吉市合ノ原町字櫨原（ハゼハラ）がある。他郡市を合わせて県内の櫨地名（字名）は三十六件を数える。うち十七件は天草地域にある。玉名郡天水町部田見および立花の字櫨方（ハゼカタ）は細川藩の製蝋事業資金を得るため有明海を干拓した新地の地名であり、他にも藩政時代のハゼ栽培にちなむ地名もあるのだろうが、個別調査はできていない。

しかしながら、細川藩のハゼ栽植政策が及ばなかった天領・天草に櫨地名が集中し、藩政時代からハゼ栽培が盛んだった水俣市に櫨地名がなく、御船川や菊池川河口近くに通称としてのハゼ塘はあっても小字の櫨地名が検出されないことなどから、ハゼノキと櫨地名の関係は極めて薄弱としか言えない。

とすれば、櫨地名のハゼ（ハジ）は同じ発音の他の語の当て字である、という仮定に立っての検討が必要になってくる。

前述のように櫨の吉名はハジである。身近な用語としては恥があるものの正訓はハヂであってハジとは違う。土地区域の表現として納得できる語でハジという言葉を探すと端（ハシ、ハジ）がある。すでに検討を重ねてきたが、地名用語としてのハシは蓮・荷・橋・梁・柳など種々の当て字があって、端に櫨が当てられても不審なことではない。

一勝地丁字櫨ヶ平は芦北町境の山間地。「清正公が球磨の山々に驚いて兵を戻した所」と語られる清正公岩の前を流れる告川（つげがわ＝球磨川支流）が球磨と葦北の郡界である。櫨ヶ平はこの川の右岸沿いで〝区域の端（櫨）のヘリ（平）〟という意が実感できる。櫨ヶ平が示す字名には藩政期の領界、さらに有史前の〝国境の地〟という深奥な物語が秘められているように思われる。

【うえむら・しげじ／宇土市生まれ、元熊本日日新聞社記者】

今月の詩（うた）⑰

人吉球磨児童生徒文詩集「やまぎり」から

第35号（2009年3月発行）　選・作文の会

リースづくり

黒肥地小一年　森田 ほのか

おかあさんと
リースをつくった。
りぼんやまつぼっくり
いろんなものをかざった。
そして
きれいなリースのでき上がり。
おかあさんの
おみせにかざった。
クリスマスになったみたいで
おきゃくさんに、ほめられた。
とてもうれしかった。
また、つくってみたいなあ。
とてもきにいった。

【評】おかあさんと作ったリース。お店の飾りにするために二人で工夫しながら丁寧に作ったリース。それをほめられてほんとうにうれしそうで、すごく気にいっているようだ。大切な宝になったことだろう。

小鳥

黒肥地小・柳野分校三年　源島 竜蔵

小鳥を見てたら
小鳥がとんだ
とおいとおい空の上
小鳥はどこまで
行くのかな
いつか小鳥のように高い
空の上に行きたいな

【評】とおいとおい空の上に、小鳥がスーと飛んでいくのを、一人でじっと見ているのであろう。飛べない自分から見て、スイスイと飛べる小鳥をうらやましく思っていることが、「いつか……行きたいな」の言葉に表れている。

一武小　四年　東　尚輝

「忍びの国」

久馬　俊

暑い。もともと故障気味だったが、このところ体温に近い猛暑日がつづいていて、脳みそが機能不全になった。どういう映画が上映されているかも確かめもせず、フラフラと映画館に向かった。予告編で、伊賀で一番の腕をもつが、彼女にからきしダメな若い忍者の物語であると宣伝していた。そういう映画なら退屈しないだろう、どういう忍術を使うのだろうと、思って映画館に入った。観客は少なかった。いつも少ないので違和感はない。

それにしても少ない。経営は大丈夫だろうかと心配してしまう。経営悪化を理由にその映画館が撤退したら、近くには映画館はなくなる。それは困る。娯楽が増えて映画離れが進んだのだと友人は説明してくれた。友人は、レンタルビデオの普及も映画館の観客数の減少の原因になっているともいう。確かに、好きなビデオを簡単にみることができたら、それに越したことはない。決して映画好きではないが、それでも、「ションシャークの空のもとに」など僕にもお気に入りの作品がないわけではない。「時計仕掛けのオレンジ」も悪くない。しかしレンタルビデオだけでは困る、やはり映画館が欲しい。映画館が皆無の状態になったら、寂しすぎる、若者はまず地元を出る。

「忍びの国」は単純そうで、けっこう、むずかしい映画だった。意外に、史実を踏まえてもいた。モティーフは『カムイ伝』と同じだろう。主役・無門の大野智は美男子、無門の彼女・お国の石原さとみは美人であった。原作は和田竜『忍びの国』（新潮文庫）。コミック化されてもいるが、それは見ていない。織田信雄（織田信長の二男）役の知念侑季の演技もよかった。信雄は、本能寺の変のあとの清須会議などで秀吉に手玉にとられた二世武士である。二世武士は軟弱だ。知念は信雄のそうした性格にあった演技をしていた。

近いうちにまた映画館に行こう。もちろん誰にも分からないように行く。「忍びの国」を観たら、どうしても、そうした行動になる。高倉健を観たあとに、高倉健的になっていたオジサンたちもそうだった。

【きゅうま・すぐる／八代市】

マイ・文庫本

遺跡発掘師は笑わない

―元寇船の眠る海

白城松男

桑原水菜 著（角川文庫
（2017年6月25日発行）

シリーズ第6弾、文庫書き下ろし。本書は続編を予定し、本書で物語は完結していない。

どのようなストーリーになるか不明だが、「元寇（げんこう）襲来」をテーマのひとつにしているのは確かであろう。

元寇襲来については、網野善彦『元寇襲来』、服部英夫『元寇襲来』が有名である。前者は網野史学の画期となったと評される作品で、後者は通説に問題があるとして、通説を徹底的に批判した一冊である。後者の研究は現在も継続中である。本書の著者・桑原水菜は後者を参考文献にあげ、前者に触れていない。

元寇襲来は、「日本全体」に影響を与えた重大事件で、相良頼俊、相良頼員も蒙古軍に対抗するため動員

されている。元寇といえば、「神風」を想起するが、それだけが論点ではなく、元が日本を侵略しようとした理由はなにか、元の単純な膨張主義と考えていいか、元の軍隊はどのような構成であったか、日本はそれにどのように対応しようとしたか、そのことによって日本の国内社会はどのように変化したか、元寇終了後、元と日本の関係はどうなったのかなど検討すべき論点は無数にある。「神風」はそうした多くの問題のひとつにすぎない。その「神風」についても、元軍を破滅させるほど暴風が突然発生したという意見もあれば、そういうのはまったくなかったという意見もある。

本書は歴史書ではなく、歴史的事件を素材にしながら、遺跡発掘現場で発生した事件の謎を解く推理小説である。今回は、海中遺跡の発掘というこれまでにない場面設定になっている点に特徴がある。海底遺跡の探索は第二次大戦後に本格化する。スキューバダイビングの技術を伴うため難しい分野とされているが、現地保存を原則とし、監視をつづける方式が国際基準になっている。日本では現時点では、具体的手法の検討は進んでないが、文化庁の有識者会議は今年度内に水中遺跡のあり方について提言をまとめる予定である。本書は、そうした文化庁の動きをにらんで構想されたのかもしれない。水中遺跡の探索は、現在では一般に「水中考古学」と呼ばれている。

今回の舞台は、佐賀県唐津市と長崎県松浦市である。元寇は太宰府占領を目指したもので、博多湾が中心舞台でないかと推測する人がいるかもしれないし、その推測は誤りではないが、元軍は博多湾沿いだけを攻めたわけでない。両者の海域にはすでに387の水中遺跡が確認されていて、同地が激戦地であったことは明白である。ちなみに「松浦市」といえば松浦党である。著者は元寇と松浦党を関係づけるつもりなのだろか。本書には、その解答が明確に書いてある。

登場人物は、遺跡発掘の天才・西原無量、彼のマネジャー永倉萌絵、無量の友人・相良忍のいつものメンバーである。3人の関係は微妙で、それもシリーズを面白くしているが今回、相良忍がどういう人物であるかを作者は思いきって明らかにしている。

【しらき・まつお／八代市】

老いの片づけ

武井京子

最近、古い家屋の一部を壊そうかどうかと思案しはじめた。家の中には要らない物がそれこそいっぱい。

古い畳を処分する時は、ノコギリで三分割してゴミ処分場に持ち込むと、一枚二十kgで二百円くらいで処分できる。小学校の運動会へ歩いていく時、近所の人が畳を切っていたので、聞いみたら分かった。ぼんやり生活していたら知らないことばかり。業者さんに頼むと一枚千五百円。この方法ならと、私もやってみることにした。三百円のノコギリを買って来て、十数枚を整理した。

古いタンスはどんちょで壊して可燃物で処理場へ。古い掛け時計は百年前の品物と分かり修理してもらったが動かなかった。勉強机は知人に貰ってもらったり、これはいつ買った、これはお祝いでいただいた品物などと考えると捨てるのに躊躇してしまう。

子どもの日記や作品、参考書などは思い出があるので迷った。高校までしかいなかった子どもたちの生活が思い出された。物があれば残される子どもが、親が死んだのち片づけに困るだろうから、まだ元気なうちに片づけようと始めたが、捨てられない。

昭和三十年代の物の少ない時代を思い出せば、いつか使うだろうと、つい考えてしまうものである。七十代になれば物はもう要らない。おいしい食べ物や安全安心な食物がある程度あれば済む。少々おしゃれをと思い、ネックレスをつけようとしたが留め金が面倒でやめてしまった。

今は、よく動く手と足、おいしく食べられる歯と飲み込む力、思考する脳があればよく、それ以上は望むことはない。あとは高齢の夫婦が仲良く助け合い、一日を感謝して暮らせるだけでよい。

物を片づけながら、暮らし方を反省したり、物欲にまみれた若かりし頃を思う。でも世の中の経済活動は物の消費購買でまわっているから複雑だ。考えていると手が止まってしまう。年を取った時の生き方は、難しいといわれるが、単純でないところがわかるようになったということか。

【たけい・きょうこ／人吉市】

人吉新市庁舎の基本設計・俯瞰図を見て

＝街づくりの一環としての市庁舎建造＝

「後世に誇れる木造新市庁舎を創る会」　松本晉一

前号の木造市庁舎要望書提出の投稿から1ヶ月が経過しました。そして7月12日、人吉市は新市庁舎の基本設計と俯瞰図を公表。私は人吉新聞のその内容と市庁舎俯瞰図を見て、『公開された「人吉新市庁舎説明」記事を読んで』と題して翌日に人吉新聞へ意見投稿、それが17日付の〝読者のひろば〟に掲載されました（図①参照）。その要約は：

1、この俯瞰図デザインは市民や業界団体には「想定外」のデザインであり、これまでの市民や業界の要望や陳情を無視したデザインであること、しかも公表直後の〝後出しの案（俯瞰図）〟であること

2、この俯瞰図デザインは、これはどこにでもある普通のオフィスビルであり、「人吉の風情」、「人吉らしさ」もなく、さらに「この地の自然、歴史や文化」を感じるものではないこと

3、このデザインについて、再度市議会、そして市民を始め、「景観計画策定審議会」や各種団体からも意見をもらい、人吉の町にふさわしいデザインか否かを評価してもらうこと

4、例えＲＣ造であっても、次の新しい市庁舎こそ、今後の人吉球磨の人口減少、生産力・産業力の低下を補完して、地場産業や観光の象徴となるデザイン力を持つ建造物にすること

5、基本計画での多くの意見を踏まえ、地域の木材資源を活かした、人吉独自の庁舎デザインに変更し、この俯瞰図デザインを新しく書き直すこと

6、これまでに至る意志決定や基本設計のステップ、その内容を市民に公開して、今後十分に時間をかけて議論してから、次の実施設計に移るべき

とする内容です。

そしてこのようにデザインの再度見直しを要望するのは、山下設計九州支社が設計最優秀者に選定された基準に、「設計段階で、発注者や市民の意見を容易に聞くことができ、高い技術力及び豊富な経験を有する」（昨年9月27日）とする選定理由があるからで、設計変更への対応の柔軟さ、その技術力と経験に期待するからなのです。従って山下設計側がこの見直しの要望に、どう対応し、デザイン変更が出来るのかを注視します。

基本計画の説明会

2017年(平成29年) 7月17日 月曜日

読者のひろば

公開された「人吉新市庁舎説明」記事を読んで

松本 晉一

7月12日付けの「人吉市庁舎の基本設計説明」と「新庁舎」青の俯瞰図を見ました。これまで本紙にも松岡市長にも新庁舎は〝本格木造市庁舎で！〟とお願いしてきましたが、6月7日にRC構造（鉄筋コンクリート）での建造方針が出され、7月12日は新市庁舎の基本設計説明と俯瞰図の発表でした。千歩譲って、RC造での説明記事と俯瞰図を見ての意見を述べてみます。

○具体論として…

1、この俯瞰図、すなわち全体デザインは〝人吉の町、この地に相応しいデザイン〟だと思われるでしょうか？

2、これは単なる通常のRC造5階建てビルであり〝風情あるデザイン〟だと感じられるでしょうか？

3、この図を多くの県市民と職員に見せもらい、意見と評価をもらうべきだと思われます。

4、さらに「景観計画策定審議会」他の団体にも、人吉の町に相応しいか、人吉らしさがあるか、地域景観にマッチしているかの意見を求めて、評価してもらうべきと考えます。

5、本年1月の4階建てRC造5階建てビルや前の予算とは、規模・内容ともに大きく変わりましたが、とても歴史と文化を感じる庁舎とは異なるようです。

6、これまでの内部審議や設計過程をオープンにし、基本設計、実施設計へのステップ、手順等を公開・議論してから実施設計に移るべきです。

7、今後、20～30年で人吉球磨の人口は減少、生産・産業力の減少も予想されます。それらを補完し、地域観光の象徴となる建造物とそのデザイン化を望みます。

○結論として…

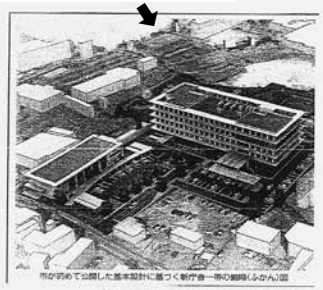
この俯瞰図は単なる普通のオフィスビルとそのものであり、当初、市長の言う木造優先の考え方もなく、私どもも市民や業界団体にも想定外の市庁舎イメージと思われます。過去1年半以上の陳情や要望が盛り込まれているのでしょうか？

今は木の時代です。ましてや、この人吉球磨は木材・林業の宝庫です。基本計画への多くの意見を踏まえ、地域の木材資源を活かした独自の庁舎デザイン、この人吉相応しい市庁舎イメージ（俯瞰図）の見直しをお願いします。

（人吉市九日町）

人吉新聞 2017 7月17日

人吉らしさのないデザイン



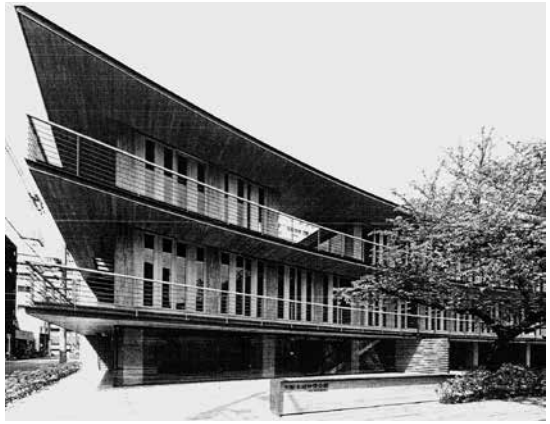
市が初めて公開した基本設計に基づく新庁舎一帯の鳥瞰（ふかん）図

単なるオフィスビルでは？

基本設計の内容を説明する松岡市長

図①　人吉新聞投書と発表された俯瞰図

この基本計画と俯瞰図を元に、市側は7月20日から、各校区別の説明会を開始しました。当会からの発言は、初日には山口会員が「お城の様な長塀的な庇（ひさし）を出すべき」、「当初の予算19億が、3月に40億、そしてなぜ今回は55億にも増加したのか、業者の言いなりでは?」、「そのことになぜ市議会から反対意見が出ないのか」。21日に井上会員は「国や県は地産地消を奨励しているので、市庁舎の建造はRC造に限定されず、木造での建造も可能であるはず」等の意見、25日には松本が「このデザインはこの町にふさわしくないので、新しいデザインに書きなおして欲しい」と



図② 木造デザイン例　大阪木材仲買会館（東京人7月号より）

要望、事例として竹中工務店の「大阪木材仲買会館」の写真（図②木造ザデイン例）を会場で回覧。27日には吉岡会員が「将来人口が減少するのに、このような大きな建物ではなく、小さな建物でも十分ではないか」と主張。しかし会場の市民からは、逆に「とてもよい案を出してくれた、しっかりと進めて欲しい」など、残念ですが市側の基本計画や俯瞰図を肯定する意見、また「市庁舎は執務が中心であり、外観やデザインなどは不要」他の意見も出されました。今回の各地区での会場発言の内容を知りたいと思います。

私どもは本誌7月号「本格木造市庁舎・要望書提出の

人吉新市庁舎説明会（7月20日）

その後」の最後に、例えRC造（鉄筋コンクリート）であっても、今から間に合うこととして、5項目の提言を出しています（本誌2017年7月号68頁）。これらに対する今後の市側のデザイン変更への対応予想として：

1、全体デザイン（俯瞰図）が「人吉らしさ」を踏まえ、しっかりと変更されるか？　＝すなわち、当方（市民）の意見が山下設計にどう伝わるか?

2、7月28日までの各地区説明会での意見、要望を踏まえて、さらには「景観計画策定審議会」他の意見・提言を踏まえて、俯瞰図のどこをどれだけ変更、修正するか?

3、当初の俯瞰図に、単に軒（のき）や庇（ひさし）、外観に多少の修正（人吉らしさ?）を加えて、〝それで良し〟とするのか?

などが考えられます。

京都工繊大の松隈洋教授の意見（熊日新聞）には「私たちの日常生活を支えるのが公共建築。建物を見れば、当時の人々が何を大事にしてきたかを学ぶことが出来る」とあります。このように市庁舎の姿・形はその時代の人吉市民の考えを現わすことにつながります。人吉のシンボルとなる今回の市庁舎デザインを現市民が、このデザイン案をそのまま容認することは、後世に〝大きな悔いを残す〟ことにつながるものと考えます。

私どもとしては、例えRC構造であっても、今回の新市庁舎造りを人吉の〝新しい街づくり〟の一環として捉え：

①国や県の意志（予算・工法）中心の行政主体のお任せではなく、地産地消、市民の意志や考えを主体とした、人吉にふさわしいデザイン例を提示して行政をリードし、その住民主導が地域再生（街づくり）の基本となること

②今後、4年以上に及ぶ基本設計・実施設計から本体完成まで、市庁舎造りの予算や設計の

新市庁舎説明会（7月25日）

意志決定と建造過程そのものを公開してもらい、このステップを次の時代の新しい街づくり＝地域文化創生の起点とすること

③今回の基本設計の意図、国からの棚ぼた的予算給付内容をチェック出来るオンブズマン、チェックマンが是非、必要と思われる。それを元に原型復旧指示の理由、国の予算給付の条件（なぜ木造では造れないのか）を確認

④後世に誇れる市庁舎を創るためにも、予想されるこの数年の物価上昇、建設ラッシュの時期を避けて、復興予算給付のタイムリミットと必要十分な予算の維持確保を含めて、今回の俯瞰図＝基本設計、実施設計を十分に議論・変更し、多くの住民の賛同を得る建造物にする

これらを今後の方針・目標として捉え、より人吉の町にふさわしい市庁舎建設、そして街づくりに向けて活動してゆきたいと考えます。この日本の何処かに、必ず人吉市庁舎にふさわしい、そして幸福をもたらす人材と情報が存在するものと期待しています。

皆様方には〝後世に誇れる人吉市庁舎の建造〟に向けて、「人吉らしさ」のイメージだけではなく、具体的な例示を挙げて、ご意見やお考えを提示して頂ければ幸いです。今後とも、本誌読者及び市民県民の皆様方のご支援、ご協力をお願い致します。

（平成29年8月7日　連絡先：TEL０９６６・２２・２９２８
Email : smatsu@fsinet.or.jp）

○人吉新市庁舎問題・関連資料

・「これからは木の時代、人吉の新市庁舎が、なぜ鉄筋コンクリートなのか?」（くまがわ春秋第10号２０１７年１月号）

・「新市庁舎づくり：これからの人吉のために」＝人吉市役所・新庁舎に本格木造を希望する理由」（くまがわ春秋第11号２０１７年２月号）

・「松岡隼人・人吉市長、田中哲・市議会議長へ望むこと」（くまがわ春秋第15号２０１７年６月号）

・「本格木造庁舎・要望書提出のその後」（くまがわ春秋第16号２０１７年７月号）

・「人吉新市庁舎の基本設計・俯瞰図を見て」（くまがわ春秋第17号２０１７年８月号）

・「モダンの粋、刻んだ記憶　旧逓信病院最後の見学会」２０１７年７月８日　熊本日日新聞

・山田朝夫「流しの公務員の冒険」病院再生１０８～１１１頁２０１６年　時事通信社

・雑誌「東京人」２０１７年７月号　都市出版

現・新2人の争い　八代市長選

任期満了にともない八代市の市長選挙が実施される。8月20日告示、27日投票開票の予定。八代市では、このところ、市長が1期4年で任期を終える状況がつづいている。市議会は、現職派と新人派に二分されているとの報道もある。今回も、接戦になるとと予想されている。

現時点で、立候補を予定しているのは現職の中村博生氏（58）と新人の幸村香代子氏（55）の2人。

中村博生氏

幸村香代子氏

市庁舎の建設問題、市民病院入院病棟の再開問題、クルーズ舟の帰港問題が争点になると予想される。中村氏は「1期目で取り組んだ事業が形になってきたが道半ば、市政の安定こそが八代発展の基礎になる」と市議会本会議で発言している。幸村氏は「市役所新庁舎建設や市民病院の早期再建」などを出馬理由にあげている。

8月6日、両者の公開討論会（２０１７年八代市長選挙公開討論介実行委員会主催）が予定されていたが、台風5号接近のため中止になった。

同時に実施される市議会議員選挙も、議員定数が32から28に減少したこともあって、激しい選挙戦になると予想され、各陣営とも気を引き締めている。現職4人引退、新人11人が出馬の見込み。

選挙権が18歳に引き下げられたのちの最初の選挙で若者の投票行動にも注目が集まっている。

有権者数１０万８４６１人（男：５万０１１６人、女５万８３４５人）（3月2日現在）。

アオコ発生

編集部

水温が上昇する夏には、ダム湖でアオコが発生しやすい。今年も、瀬戸石ダムのダム湖で7月20日頃に発生した。アオコには鮎、鯉などの魚類の生息に悪影響を与えるほか、異臭を発生させるなど生活環境にも影響を与える。清流球磨川というブランド名を失わせるおそれがある。荒瀬ダム撤去理由のひとつはアオコ発生にあった。浄化措置をとれば発生を抑制できるが、現時点では、その措置は十分にとられていない。

アオコとともに、流木・雑木などの浮遊物も目立つ。浮遊物はアオコの栄養源になるだけでなく、景観を壊すので、その除去が必要である。同ダムは、7年前から、流木対策に力をいれるようになったが、現時点では、抜本的に解決していない。

気象条件にも、こんごも、アオコは発生・拡大する危険がある。

浮遊物には、ペットボトル・空き缶などの放棄物も目立つ。同ダムを管理運営する電源開発株式会社によると、洗濯機・テレビなどの不法投棄物もあるという。住民のマナー向上も必要である。

瀬戸石ダム湖のアオコ（8月２日）

瀬戸石ダム付近の浮遊物

外来語から学ぶ英単語（17）……藤原　宏

キャリー　・　カーゴ　・　チャージ
carry　cargo　charge

「**car**（カー）、車・乗用車」の語源でもあるラテン語の「**carrus**（カッルス）、二輪馬車」から派生した同根語で、三重語の関係にあります。

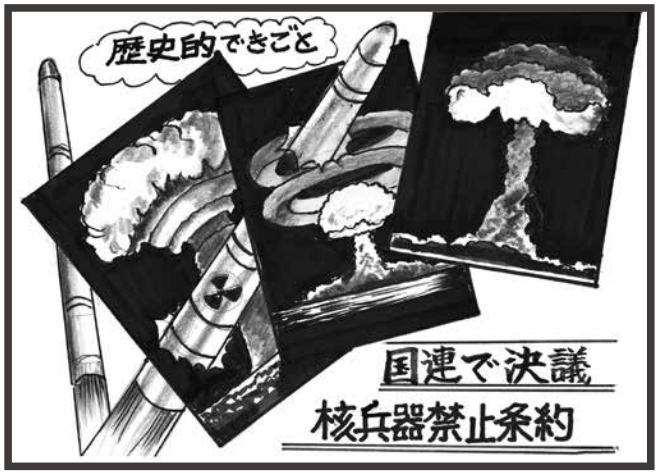
carry（キャリー）は、「運ぶ」を表す最も一般的なことばですが、これには「重さを支える」意も含まれています。そこからある状態や動作を持続させる意が生まれ、「身につける・収容できる・（計画を）進める・（商品を）扱っている・（病気の）保菌者」など多くの意味で使われます。

cargo（カーゴ）はスペイン語「**cargar**（カルガル）、積み荷」からの借用で、「**cargo boat**（ボート）、貨物船」「**cargo plane**（プレーン）、貨物輸送機」など合成語に使われる他、「船舶一艘・貨車一台・飛行機一機」分の車を「**a cargo of cars**」と言いますが、一般的に運送貨物には **freight**（フレイト）の方が好まれるようです。

charge（チャージ）は、「荷物を積む・容器に物を詰める」の原義から「負担を負わせる・料金を請求する・カード払いにする・充電する・弾丸を装填する・突撃する」など多くの使い方があります。

「**car**・**carrier**・**career**」、「**car**・**chariot**・**cart**」も同根です。　**(383)**

ひろしの…　げっかん・ぎひょう



―世界の核兵器をゼロにする画期的な条約　国連で採択！―

世界で唯一の被爆国日本が欠席したことで世界の人々はがっかり。しかし日本から被爆者や平和を求める人たちが参加して決議されました。

くまがわ学習塾 ⑧

問１　球磨川の支流を５つ挙げよ。（例　川辺川）

①（　　）
②（　　）
③（　　）
④（　　）
⑤（　　）

問２　「私」を基準にしたときの家族・親戚の名称を漢字で書け。

（例　母の妹＝叔母）

①　父の兄　（　　）
②　祖母の兄　（　　）
③　母の妹の子　（　　）（　　）（　　）（　　）
④　祖母の子　（　　）（　　）（　　）（　　）
⑤　娘の兄　（　　）

問３、次の式を解け。

７＋３＝４１０２１
８＋３　＝５１１２４
５＋４＝１９２０
９＋６＝　？
７＋４＝３１１２８
５＋２＝３７１０
１７＋８＝９２５１３６
１３＋６＝？

問４、次の場所が存在する市町村名を書け。

（例、球泉洞は（　　）にある。→（球磨村）

①赤松館は（　　）にある。
②熊本総合病院は（　　）にある。
③小山勝清の生家は（　　）にある。
④大村横穴墓群は（　　）にある。
⑤浜眼鏡橋は（　　）にある。

⑥市房ダムは（　　）にある。
⑦丸目蔵人佐の墓は (　　) にある。
⑧エンブリー夫妻が研究したムラは（　　）にある。
⑨中山観音は（　　）にある。
⑩まんが美術館は（　　）にある。
⑪びゃーどんの墓は（　　）にある。

問５、下の写真の名称を答えよ

①城跡（八代市坂本町）

答（　　）

④八代市にある工場

答（　　）

②駅舎（球磨村）

答（　　）

⑤球磨郡にある施設

答（　　）

③人吉市にある家屋

答（　　）

※答え合わせは次号でおこないます。
前回の答え合わせは 85 頁で。

★全問正解者には抽選で弊社の書籍をプレゼントします。ハガキ又は封書で弊社まで解答をお送りください。

③蟹作　（　がんつくり　）人吉市

【解説】
■明治初期には、「蟹作」と表記。「蟹」は「蟹」の異字体。
■同地付近から製鉄異物が出土している。したがって「カネ・ツクリ」が訛った地名の可能性があるが、詳細は不明である。

④合志野（　おしの（おおしの）　）八代市坂本町

【解説】
■行政表記は「おしの」。地元では「おおしの」と発音。
■江戸時代の文献は「大篠」と表記。

⑤木上　（　きのえ　）球磨郡錦町

【解説】
■南北町時代から存在する地名。以前は、「木枝」と書いた。

問５、写真を見て問いに答えよ

①城跡（葦北郡芦北町）

（　佐敷城（佐敷丸岡城）　）

【解説】

■佐敷城には、新旧がある。写真の佐敷城跡は新城。旧城は新城の東側にあって、「東の城」とよばれている。それとは別に「東の城」の南に「兼丸城」もあった。
■新城は加藤清正の築城による。清正は肥後北部の支配を担当した（南部は小西行長が担当）が、葦北については清正の「飛び地」とされた。清正は丸岡山を利用して新たに城をつくった。そのため新城は「佐敷丸岡城」ともいう。築城は天正 17 年 (1588 年) 頃と推測されている。
■薩摩街道と人吉街道が交わる要所にあり、吉尾方面へもつながっている。天草も近い。島津、相良、天草を「おさえる」には最適の地である。
■同城については、「梅北の乱」有名。文禄元年（1592 年） 6 月 15 日、島津家家臣の梅北国兼が朝鮮出兵で留守の佐敷城をのっとり、翌日、八代城（麦島城）も攻めた事件。国兼は短時間で制圧された。秀吉の朝鮮出兵を機に、秀吉の支配に対する地元勢力の不満が爆発した事件。国兼の首は名護屋城で晒された。秀吉は国兼の妻も捕まえ、彼女を「火あぶり」にした。秀吉は残酷であった。通常は、乱れるところ、国兼の妻はそうではなかった。それをみてルイス・フロイスは「異教徒ながら、立派である」と書いている（フロイス『日本史』）
■人吉の歴史書は、「梅北の乱」を文禄元年でなく文禄２年（1593 年）とする例が多い。他方、『熊本県の歴史』は天正 20 年６月 15 日とする。どう考えるべきか。天正から文禄への改元は 12 月８日であるので、「熊本県の歴史」の記述が正しい。「文禄の役」もそれ自体としては天正 20 年にはじまっている。
■元和元年（1615 年）、江戸幕府は一国一城令を発し同城は取り壊された。寛永 14 年 (1687 年)、天草・島原の乱、発生。そのとき、城の徹底した破壊がおこなわれた。
■「天下泰平」銘の鬼瓦などの遺物が出土している。

②駅舎（葦北郡芦北町）

（　白石駅　）

【解説】
■同駅については、松本晋一「白石駅」本誌８号を参照。

③人吉市にある建物

（　町家ギャラリー立山　）

【解説】
■同ギャラリーについては、山口啓二「町家ギャラリー立山　㊤㊦」本誌８号、９号を参照。

④球磨郡山江村にある石橋

（答（　森下（もんのした　）橋　（球磨郡山江村西川内））

【解説】
■昭和 16 年 (1941 年) 架橋。山江村の唯一の石橋。

⑤源流水リレーの到着地

（　水嶋（水嶋神社）　）

【解説】
■水嶋は万葉集に登場する有名な嶋。近くに、「万葉集の里公園」がある。

■ツツジ（湯前町、山江村）
ツツジを市町村の花としている例は多数ある。静岡県は県の花とする。熊本県内では、山江村、湯前町のほか、水俣市、山鹿市、南関町、大津町でツツジを採用している。
■リュウキンカ（あさぎり町）
キンボウゲ科リュウキンカ属の多年草。あさぎり町が国内自生地の南限とされる。そのことと、春先に黄色い花を咲かせることから「希望の春」を告げる花として選定。
■シャクナゲ（水上村）
シャクナゲはツツジ科ツツジ属の常緑の低木。「石楠花」と書く。同村の「シャクナゲ公園」には、約3000千本のシャクナゲを植えらていて、４月下旬に「シャクナゲ祭り」がある。
■フクジュソウ（相良村）
キンボウゲ科の多年草。「福寿草」と書く。別名「ガンジツソウ（元日草）」、「ツイタチソウ（朔日草）」。春を代表する花。花言葉は、永久の幸福、祝福。
■ツバキ（五木村）
五木の子守唄「花は何の花、ツンツン椿、水は天からのもらい水」に由来。

問２　トルストイの作品名を５作あげよ。　★例　イワンの馬鹿

①戦争と平和
②イワン・イリイチの死
③光あるうち光のなかを歩め
④３匹のくま
⑤家族だからって、わからないこともある　など多数

問３、次の四字熟語を完成させよ

①　（　白　）砂 青　松　（はくさせいしょ）

【解説】
■白い砂浜（白浜）と松林（青松）がおりなす配色の美しさを示す表現。天橋立（京都）、美保松原（静岡）がその例。
■太田猛彦『森林飽和』（NHKブックス）によれば、「青松」は海岸林で、その大半はクロマツである。戦国時代末から江戸時代にかけて植林された、人工林である。したがって「羽衣」伝説は江戸以降に成立したことになる。問題は、なぜ、植林したかだが、太田は飛砂（ひさ）を避けるためとする。安部公房『砂の女』は飛砂の状況を描いた作品で、昭和２０年代まで人間は飛砂に苦しめられていた、その後、飛砂は激減するが、それは森林の飽和状況にあるという。同書は山林の変化についての必読の書である。『砂の女』の現実性については、マイケル・ウェランド『砂　文明と自然』（築地書館）も注目している。

②　一　望　（　千　）里　（いちぼうせんり）

【解説】
■一目で広々としたすばらしい景色を見渡せるという表現。
■「一望」を利用した類似表現に、「一望千傾（いちぼうせんけい）、一望無垠（いちぼうむぎん）、天涯一望（てんがいいちぼう）などがある。

③　風　光　明　（　媚（美）　）　（ふうこうめいび）

【解説】
■「風光」は眺めや景色。「明媚」は清らかで美しいこと。地域を限定しないので、各地の観光名所や景勝地を表現・宣伝するときの決まり文句になっている。以前は、「明媚」だけを使用していたが、「明美」と表現する例がでてきた。一部の辞書は「明美」も可とする。

④　水　（　村　）　山　郭　（すいそんさんかく）

【解説】
■「水村」は水辺のムラのこと、山郭は山際のムラのこと。自然あふれる農村を表現するときに使用する。
■出典は杜牧（唐）の七言絶句の「江南春」。

⑤　暮　（　白　）　蒼　然　（ぼしょくそうぜん）

【解説】
■夕方になり、あたりが薄暗くなっていくこと。
■出典は、柳宗許（唐の詩人）の「はじめて西山を得て宴遊する記」。

問４、次の地名を書け。　★例　覚井（かくい）球磨郡あさぎり町

①向淋　（　むかいそそぎ　）球磨郡球磨村

【解説】
■球磨村淋地区の対岸にある地域名。球磨川には左右両岸で同一地名の地域が数多くある。「淋」と「向淋」はその一例。

②高田辺（　こうだべ　）葦北郡芦北町

【解説】
■球磨川左岸にある集落名である。同地には瀬戸石ダムがある。
■同ダム付近で肥薩線はトンネルになっているが、同ダム建設前にはトンネルはなかった。松本晋一「瀬戸石駅」（本誌第５号）参照。
■同地は急斜面で大規模な土砂崩れが２箇所で発生している。

前号【くまがわ学習塾⑦の答え】

問１　市町村の花の名前を書け。★例　五木村（ツバキ）

①八代市　（　桜　）
②人吉市　（　梅　）
③多良木町　（　百太郎ツツジ　）
④球磨村（　山桜　）
⑤錦町　（　ツクシイバラ　）
⑥芦北町（　　）→選定していない。
⑦山江村（　ツツジ　）
⑧あさぎり町（　リュウキンカ　）
⑨水上村　（　シャクナゲ　）
⑩湯前町（　ツツジ　）

【解説】

■桜（八代市）と梅（人吉市）

両者は、ともに、日本を代表する花である、殊に、桜は、「花」といえば桜を指すほどだ。100 円硬貨の裏面も桜をデザインしている。「桜イコール花」は平安時代に成立した通念で、それより以前の奈良時代は「花イコール梅」であった。

八代市は、八代城跡や荒瀬ダムのダム湖など市内の多くの場所で咲き市民になじみがあることを理由に合併３周年を記念して平成 20 年８月１日に「市の花」を「桜」にした。荒瀬ダム湖（今は、ない）周辺には確かに桜が多い。自生していた桜もあったろうけど、荒瀬ダムを建設時の桜井知事の意向も反映している。桜井知事は、荒瀬ダムが完成したら、ダム湖に桜を植え観光地にすると約束し、じっさいに桜を植えた。桜井の「桜」を念頭においた約束であった。

他方人吉市は、旧藩主相良家の紋所（長剣梅鉢」）であること、市直営の人吉梅園があること、他の花に先駆けて咲くことを理由に市制 30 周年を記念して昭和 47 年 10 月に、梅を「市の花」に選定した。

■山桜（球磨村）

春先を知らせ花であること、満開の山桜は秋の実りをもたらすことを理由に村の花に指定。山桜は李（スモモ）の一種であると考えられてきたが、最近では、桜の一種であるとみる見解が有力である。

■百太郎ツツジ（多良木町）

百太郎ツツジはレンゲツツジの別名。百太郎溝の取入が設置されていることも勘案し、町の花に指定。（昭和 60 年）

■ツクシイバラ（錦町）

錦町といえばツクシイバラである。しかし、以前は、「ツツジ」を「町の花」にしていた。しかし、住民の要望を受け、平成 20 年 10 月に、「ツクシイバラ」に変更。

★ツクシイバラについては、合原康美「ツクシイバラを守る除草作業（本誌 12 号）、尾方洋子「おもてなし」（本誌 13 号）、高田由美子「ツクシイバラコンサート」（本誌 14 号）、岡部保雄「ツクシイバラとの御縁で」（本誌 15 号）、川崎久宣「ツクシイバラと私」（本誌 16 号）参照。

★ツクシイバラがいつから球磨川流域で自生していたかは不詳。1917 年６月９日、前原勘次郎（元人吉高校教諭）があさぎり町上（旧上村）で標本を採取し、それが「ツクシイバラ」の公式確認の端緒である。今年はそれから 100 年目である

★「ツクシイバラ」は「ツクシ」と「イバラ」の合成語。ツクシは「筑紫」のことで九州を指し、「イバラ」は「ノイバラ（野茨）」のこと。合わせると「九州のノイバラ」になる。前原のいう「ツクシサクラバラ」は、「九州固有のバラ科バラ属のサクラ」というほどの意味になる。バラ科に属すること、九州に自生することは当初から認識されていたことになる。

★前原による標本採取の翌年、小泉源一郎（東京帝国大学嘱託教員、のち京都帝国大学教授。日本植物分類学会の創立者。1883 年 11 月１日～ 1953 年 12 月 21 日）がそれを Rosa adenochaeta Koidz と命名。「薔薇属、線毛種、小泉命名」といった意味の学名（ラテン語）。学名にラテン語を使用する方法は中世以来の伝統に由来する。ラテン語の力は絶大で植物名の使用などに限定されない、たとえば聖書も中世まではラテン語で記されていた。マルティン・ルターがそれをドイツ語に翻訳し、清教徒革命を先導することになる。法律学でもラテン語の影響は強い。法諺の大半はラテン語である。

★ 1926 年、中伊猛ノ進（東京帝国大学教授。1882 年 11 月９日～ 1952 年 12 月６日）は、学名を、Rosa polyantha Siebld et Zucc var. adenochaeta (Koidz) Nakai に替えた。Siebld はシーボルトのこと。幕末日本に来日し「シーボルト事件」の主役のシーボルトである。Zucc はシーボルトとともに日本の植物を海外に紹介したツッカリーニ。中伊はふたりの名前を出すことで日本の植物学の分類法を国際基準に接続させようしたのであろうか。ついでながら、前原と中伊の二人は、本草学から植物学の分離をすすめた松村任三（1856 年２月 14 日（安政３年１月９日～ 1928 年５月４日）の教え子である。松村が教授時代の講師は牧野富太郎（1862 年～ 1957 年）。牧野は「日本の植物学の父」と評されるが、熊本の考古学史の重要人物・寺西正路に決定的影響力を与えた人物でもある。木崎康弘『肥後と球磨、その原史世界に魅せられし人々』（人吉中央出版社）46 頁以下参照。

★ 1953 年、大井次三郎（東京科学博物館図書課長。1905 年９月 18 日～ 1977 年２月 22 日。牧野富三郎ともに植物分類学の基礎を固めた人）が学名を、Rosa multiflora] Thunb var adenochaeta (Koidz) Ohwi、に変更。Rosa はバラ属、multiflora] はノイバラ種のこと、Thunb は植物学者カール・ツンベルグを指す。var adenochaeta は「変種」のこと。「ツンベルクの植物誌でいうノイバラの変種」という意味になろうか。

★ 1988 年、籾山泰一（1904 年１月 11 日～ 2000 年３月３日。中伊猛ノ進に植物学を習う。資源科学研究所などに勤務）と大場秀章（東京大学教授　1943 年７月 14 日～）がレクトタイプ標本（学名の基準になる標本のこと）を選定。選定物は、1917 年６月９日、前原勘次郎（元人吉高校教諭）があさぎり町上（旧上村）で採取したもの。

★ 2001 年、大場秀章が「ツクシイバラ」をノイバラの一種であることを正式に発表。

おっとわっとあすび その❻

絵と文／松舟博満

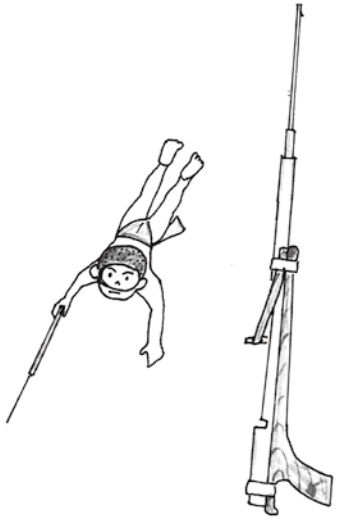
鉄砲イザリ

夏休みは、こんのなからんば、始まらんじゃった。

枕蚊帳（かや）の、いっちゃぶれた（破れた）骨ば、二尺ぐりゃで、ヤスリで打ち切って、一方ん方は、一寸ぐりゃで、直角ん曲げてうぇて、まぁ一方ん方は、ヤスリでとんぎらきゃて（尖らして）、イヲに、ようぬかるっごてしたとば、ヒヤシて言いおった。

一尺ぐりゃん板ば、ノコやコガタンで、銃身の受けの、長かとば作って、上ん方ば彫刻刀で、ひっこぼらきゃてから、ニガ竹の七寸ぐりゃんとけ、節ん二つあっとば、一尺ぐりゃの長さで打ち切って、節と節ん間をば、なっだけせもう、縦に溝ば彫ってから、受けのひっこぼったとけぇ、竹ん溝ば上んして、ハッガネで、動かんごてくびり、ヒヤシで、先ん方の節に穴ばあけて、ヒヤシば、溝ん方から差し込んで、ガタガタせんごてぇ、先ん方に一回りこみんか竹ば差し込み、何回かヒヤシば動きゃて、ひっかからんか、すべりばたしかめおった。

ちゃんと動けば、板で作った握りから、ひとさし指ば伸ばしてから、ヒヤシん曲がったとこっの、良う引っかかるとこんに印ばつけて、溝から、直角ん切り込みば入れて、引っ掛けば、ヒヤシんはずれん深さん削ってうぇて、ゴムば二重にしてから、ヒヤシん曲がったとこれぇ、おっとれんごてぇ、糸でむすぅで、引っ掛けにかけて、ゴムば先ん方に伸びゃて、強さばきめて、おっとれんごてぇ、ハッガネでゴムば止むれば「夏休みの友」の出来上がりじゃった。



【まつふね・ひろみつ／青井阿蘇神社・文化苑「童遊館」】

くまがわ狂句

村上鬼拳

一人旅　男見る目の出来ました
早や一年　星雲などけ行ったろか
心機一転　いつまでも秘書するもんか
サンキュー　連立組んでくれますか
趣味と実益　一と坪農家思い立ち
幸せ　健康一っちょ有るとええ
乗り切って　賞与の出せる嬉しさが
遠慮しなすな　養子は威張っとくもんよ
ハズレ　男見る目の高過ぎた
それが本当　汗した銭ア貯まるばな

【むらかみ・きけん／人吉市】

北御門 二郎・訳

トルストイ短編集

帝政ロシア時代の物語を
北御門二郎の「心訳」で贈る
現代人へのメッセージ

新たに編集された「カフカーズの捕虜」「神は真実を見そなわす」「舞踏会の後」「壷のアリョーシャ」「贋造クーポン」の5本を収録

レフ・トルストイ／作
北御門 二郎／訳
表紙絵／田口宏昭
北御門すすぐ・たえ子／編

■A5判／並製本／192頁
■定価 1,500円（+税）
送料100円

直販の申込は 〒868-0086 熊本県人吉市下原田町瓜生田675-3
TEL・FAX0966-22-7601 info@hitoyoshi.co.jp 人吉中央出版社

編集後記

昔は、お盆を過ぎれば朝夕は過ごしやすくなると感じていたが、最近の傾向は9月に入るまで気が抜けない。熱中症は勿論だが災害に関しても用心が必要であろう。★そんな中、今年の源流水リレーは源流キャンプで流域を楽しんだ。その涼しい光景は4頁に掲載★本誌の前身である「週刊ひとよし」の2012年元旦号から足かけ5年半、今回で通算172回となった木﨑康弘氏の連載「考古地誌」が一冊にまとめられ先月、世に出た。連載分に加えて新資料をもとに大幅に加筆されたもので、その分量は約600頁に達している。今月号の特集（12頁～）を読んでいただくと分かるように、専門書でありながら、内容は考古学者たちの人間臭いエピソードに溢れている。木﨑氏の学史への旅はまだまだ続くだろうから、中間報告といったところか。弊社刊行物として宣伝を兼ねて、紹介させていただいた次第である。（ま）

〒868―0015
熊本県人吉市下城本町1436―4の3号
人吉中央出版社「くまがわ春秋」編集部
info@hitoyoshi.co.jp
電話・ファックス 0966・23・3759

インフォメーション

開催中

▽夏季特別展覧会「探してみよう！ やつしろの宝もの―指定文化財大集合―」（～8月27日、八代市立博物館未来の森ミュージアム）

8月15日（火）
▽第63回人吉花火大会（中川原公園およびふるさと歴史の広場一帯）

8月17日（木）
▽多良木町ゑびす夏まつり・花火大会（同町多目的グラウンド一帯）

8月19日（土）
▽第71回犬童球渓顕彰音楽祭個人コンクール予選（～20日、人吉市カルチャーパレス）

8月20日（日）
▽「おどんがプラモコンテスト」展示（～27日、あさぎり町免田ポッポー館）

8月21日（月）
▽青井阿蘇神社「夏越祭」（同神社境内）

8月24日（木）
▽カルヴァーリョ・ラッソ人吉「夏休み体験教室」（人吉市スポーツパレス）

8月25日（金）
▽第33回にしき夏まつり（錦町役場前広場）
▽第11回球磨川音楽祭with木野雅之（人吉市カルチャーパレス）

8月26日（土）
▽第26回日本一の大鮎釣り選手権大会（球磨村の球磨川流域）
▽第11回球磨川音楽祭with木野雅之（多良木町交流館石倉）

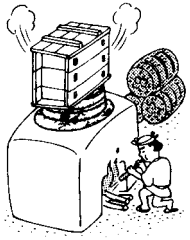
8月27日（日）
▽第2回ぎゃんぎゃん笑祭！あさぎり町（同町免田総合グラウンド）

TAKEDA Eye Clinic
たけだ眼科クリニック
院長 竹田 憲司
人吉市南泉田町39 ☎23-3096

めがね・コンタクトレンズの
アイ ウェア槇（まき）
（たけだ眼科ビル内）☎0966-23-3097

デイサービスセンター いずみ
ケアプラン作成所いずみ（居宅介護支援事業所）
協力医療機関 たけだ眼科クリニック
人吉市南泉田町70番地の3 ☎0966-28-3307

匠の技



御膳醤油
（だし入り万能しょうゆ）
・玉子かけご飯
・豆腐
・お刺身に
300ml 650円（税抜）

◆みそ煎餅
477円（税抜）

◆納豆みそ
477円（税抜）

◆納豆みそ
（お徳用）
300円（税抜）

人吉散策コース 九州相良 蔵めぐり
みそ・しょうゆ蔵

資本金 釜田醸造所
会長 釜田元嘉
社長 釜田顕
〒868-0001 熊本県人吉市鍛冶屋町16
電話（0966）22－3164
FAX（0966）22－3165
メール info@marukama.co.jp